草迷宮

泉鏡花作

一

向うの小澤に蛇が立つて、
八幡長者の、をと娘、
よくも立つたり、巧んだり。
手には二本の珠を持ち、
足には黄金の靴を穿き、
あゝよべ、かうよべと云ひながら、
山くれ野くれ行つたれば・・・・・・・・・

一

三浦の大崩壊を、魔所だと云ふ。
葉山一帯の海岸を屏風で劃つた、櫻山の裙が、見も馴れぬ獣の如く、洋へ躍込んだ、一方は長者園の濱で、逗子から森戸、葉山をかけて、夏向き海水浴の時分、人死のあるのは、此の邊では此處が多い。

一夏激い暑さに、雲の峰も焼いた霰のやうに小さく焦げて、ぱち／＼と音がして、火の粉になつて覆れさうな日盛に、是から湧いて出て人間に成らうと思はれる裸體の男女が、入交りに波に浮んで居ると、〓とたゞ金銀銅鐵、眞白に溶けた霄の、何處に龜裂が入つたか、破鐘のやうなる聲して、

「泳ぐもの、歸れ。」と叫んだ。

此の呪祖のために、浮べる輩はぶくりと沈んで、四邊は白泡となつたと聞く。

又十七ばかり少年の、肋膜炎を病んだ挙句が、保養にとて來て居たが、可恐く身體を氣にして、自分で病理學まで研究して、0、などと調合する、朝夕検温氣で度を料る、三度の食事も度量衡で食べるのが、秋の暮方、誰も居ない浪打際を、生白い痩脛の高端折、跣足でちよび／＼横歩行きで、日課の如き運動をしながら、つく／＼不平らしく、海に向つて、高慢な舌打して、

「あゝ、退屈だ。」

と呟くと、頭上の崖の胴中から、異聲を放つて、

「親孝行でもしろ！」と喚いた。

為に、其の少年は太く煩ひ附いたと云ふ。

そんなこんなで、其處が魔所だの風説は、近頃一層甚しくなつて、知らずに大崩壊へ上るのを、土地の者が見着けると、百姓は鍬を杖支き、船頭は舳に立つて、下りろ、危い、と聲を懸ける。

實際魔所でなくとも、大崩壊の絶頂は藥研を俯向けに伏せたやうで、跨ぐと鐙の無いばかり。馬の背に立つ巖、狭く鋭く、踵から、爪先から、ずかり中窪に削つた斷崖の、見下ろす麓の白浪に、揺落さるゝ思がある。

さて一方は長者園の渚へは、浦の波が、靜に展いて、忙しく然も長閑に、鶏の羽たゝく音がするのに、唯切立ての巖一枚、一方は太平洋の大濤が、牛の吼ゆるが如き聲して、緩かに然も凄じく、うゝ、おゝ、と呻つて、三崎街道の外濱に大畝りを打つのである。

右から左へ、僅に瞳を動かすさへ、杜若咲く八ツ橋と、月の武藏野ほどに趣が激變して、浦には白帆の鴎が舞ひ、沖を黒煙の龍が奔る。

是だけでも眩くばかりなるに、蹈む足許は、岩の其の劍の刃を渡るやう。取縋る松の枝の、海を分けて、種々の波の調べの懸るのも、人が縋れば根が揺れて、攀上つた喘ぎも留まぬに、汗を冷うする風が絶えぬ。

然ればとて、是かために其の景勝を傷けてはならぬ。大崩壞の巖の膚は、春は紫に、夏は緑、秋紅に、冬は黄に、藤を編み、蔦を絡ひ、鼓子花も咲き、龍膽も咲き、尾花が靡けば月も射す。いで、紺青の波を蹈んで、水天の間に絲の如き大島山に飛ばんづ姿。巨匠が鑿を施した、青銅の獅子の俤あり。其の美しき花の衣は、彼が威霊稱へたる牡丹花の飾に似て、根に寄る潮の玉を砕くは、日に黄金、月に白銀、或は怒り、或は殺す、鋭き大自在の爪かと見ゆる。

二

修業中の小次郎法師が、諸國一見の途次、相州三崎まはりをして、秋谷の海岸を通つた時の事である。

件の大崩壊の海に突出でた、獅子王の腹を、太平洋の方から一町ばかり前途に見渡す、街道端のーー直ぐ崖の下へ白浪が打寄せるーー江の島と富士とを、簾に透かして描いたやうな、一寸した葭簀張の茶店に休むと、媼が口の長い鐵葉の湯沸から、澁茶を注いで、人皇何代の御時かの箱根細工の木地盆に、裝溢れるばかりなのを差出した。

床几の在處も狭いから、今注いだので、引傾いた、湯沸の口を吹出す湯氣は、むら／／と、法師の胸に靡いたが、其さへ颯と涼しい風で、冷い霧のかゝるやうな、法衣の袖は葭簀を擦つて、外の小松へ飜る。

爽な心持に、道中の里程を書いた、名古屋扇も開くに不及、畳んだなり、肩をはづした振分けの小さな荷物の、白木綿の繋ぎめを、押遣つて、

「千両、」とがぶりと呑み、

「あゝ、旨い、是は結構。」と莞爾して、
「おいしい次手に、何と、其も甘さうだね、二ツ三ツ取つて下さい。」
「はい／＼、此の團子でござりますか。是は貴方、田舎出來で、澤山甘くはござりませぬが、其のかはり、皮も餡子も、小米と小豆の生一本でござります。」
と小さな丸髷を、ほく／＼もの、折敷の上へ小綺麗に取つてくれる。　扇子だけ床几に置いて、澁茶茶碗を持つたまゝ、一ツ撮まうとした時であつた。
「ヒイ、ヒイヒイ！」と唐突に奇聲を放つた、濁聲の蜩一匹。

法師が入つた口とは對向ひ、大崩壞の方の床几のはづれに、竹柱に留まつて先刻からー胸をはだけた、手織縞の汚れた單衣に、弛んだ帶、煮染めたやうな手拭をわがねた首から、頸へかけて、耳を蔽ふまで髪の伸びた、色の黒い、巖乘造りの、身の丈抜群なる和郎一人。目の光の晃々と冴えたに似ず、あんぐりと口を開けて、厚い下脣を垂れたのが、別に見るものもない茶店の世帶を、きよろ／＼と■して

居たのがあつてーーお百姓に、船頭殿は稼ぎ時、土方人足も働き盛り、日脚の八ツさがりを其の體は、いづれ界隈の怠惰ものと見たばかり。小次郎法師は、別に心にも留めなかつたが、不意の笑聲に一驚を吃して、和郎の顔と、折敷の團子を見較べた。

「串戯ではない、お婆さん、お前は見懸けに寄らぬ剽輕ものだね。」

「何でござりますえ。」

「否さ、此の團子は、こりや泥か埴土で製へたのぢやないのかい。」

「滅相なことをおつしやりまし。」

と年寄は眞顔に成り、見上げ皺を澤山寄せて、

「何を貴方、勿體もない。私もはい法然様拝みますものでござります。吝嗇坊の柿の種が、小判小粒になればと云うて、御出家に土の團子を差上げまして濟むものでござりまずかよ。」

眞正直に言譯されて、小次郎法師は些と氣の毒。

「何々〳〵、然う眞に受けられては困ります。此の涼しさに元氣づいて、半分は冗戯だが、旅をすれば色々〳〵

の事がある。駿州の阿部川餅は、そつくり正のものに木で拵へたのを、盆にのせて、看板に出してあると云ひます。今これを食べようとするのを見て其の人が、」

と其方を見た、和郎はきよとんと仰向いて、烏も居らぬに何ぢややら、頻に空を仰いでござる。

「唐突に笑ふから、はゝあ、此の團子も看板を取違へたのかと思つたんだよ。」

「えゝ、えゝ、否、お前様、」

と小薩張した前かけの膝を拍き、近寄つて聲を密め、

「これは、もし氣ちがひでござりますよ。はい、」

と云つて、獨りで媼は頷いた。問はせ給はば、其の仔細の儀は承知の趣。

三

小次郎法師は、掛茶屋の庇から、天へ蝙蝠を吹出しさうに仰向いた、和郎の面を斜に見遣つて、

「然う、氣違ひかい。私は又唖ででもあらうかと思つた、立派な若い人が氣の毒な。」

「お前様ね、一ツは心柄でござりますよ。」

媼は、罪と報を、且つ悟り且つあきらめたやうなものいひ。

「何か憑物でもしたと云ふのか、暮し向きの屈託とでも云ふ事か。」

と言ひ懸けて、澁茶に又舌打しながら、圓い茶の子を口の端へ持つて行くと、然あらぬ方を見て居ながら天眼通でもある事か、逸疾くぎろりと見附けて、

「やあ、石を噛りやあがる。」

小次郎再び化轉して、

「あんな事を云ふよ、お婆さん。」

「惡い餓鬼ぢや。嘉吉や、主あ、最う彼方へ行かつしやいよ。」

其の本體は却つて差惜き、砂地に這つた、朦朧とした影に向つて、躾めるやうに言つた。

潮は光るか、空は折から薄曇りである。

法師も是あるがために暗いやうな、和郎の影法師を伏目に見て、

「一ツ分けて遣りませうかね。團子が欲しいのかも知れん、其だと思ひが可恐しい。眞個に石にでもなると大變。」

「食氣の狂人ではござりませんに、御無用になさりまし。

石ぢや、と申しましたのは、是でも幾干か、不断の事を、覺えて居ると見えまして、私が何時でもお客様に差上げますのを知つて居りまして、今のやうに云うたのでござりましよ。

又埴土の團子ぢや、とおつしやつてはなりません。此のお前様。」

と、法師の脱いで立てかけた、檜笠を両手に据ゑて、荷物の上へ直す次手に、目で教へたる霞簀の外。

さつくと削つた荒造の仁王尊が、引組む状の巖續き、海を踏んで突立つ間に、倒に生えかゝつた竹薮

を一叢隔てゝ、同じ巖の六枚屏風、月には蒼き俤立たうーーちらほらと松も見えて、いろ／／の浪を縅した、鎧の袖を〓に翳す。

「あれを貴下、お通りがゝりに、御覧じはなさりませんか。」

と背向きになつて小腰を屈め、姥は七輪の炭をがさ／／と火箸で直すと、藥罐の尻か合點で、丁と据わる。

「何の道貴下には御用はござりますまいなれど、大崩壊の突端と睨み合ひに、出張つて居りますあの巖を、」

と立直つて指をさしたが、片手は据ゑ腰を、えいさ、と抱きつゝ

「あれ、あれでござります。」

波が寄せて、恰も風鈴が砕けた形に、ばら／／と其の巖端に打かゝる。

「あの、岩一枚、子産石と申しまして、小さなのは細螺、碁石ぐらゐ、頃あひの御供餅ほどのから、大きなのになりますと、一人では持切れませぬやうなのまで、こつとり圓い、些と、平扁味のあります

石が、何處からと無くころ／＼と産れますでございます。

其の平扁味な處が、恰好よく乘りますから、二つかさねて、お持佛なり、神棚へなり、お祭りになりますと、子の無い方が、いや、最う、年子にお出來なさりますと、申しますので。

随分お望みなさる方か多うございますが、當節では、人がせゝこましくなりました。お前様、蓆戸の壓へにも持つて參れば、二人がゝりで、澤庵石に荷つて歸りますのさへございますによつて、今か今と申して、早急には見當りませぬ。

随分と御遠方、わざ／＼拾ひにござらして、力を落す方がございますので、恁うやつて近間に店を出して居りますから、朝晩汐時を見ては拾つて置きまして、お客様には、お土産かた／＼、毎度婆々が御愛嬌に進ぜるものでございますから、つい人様が御存じで、葉山あたりから遊びにございます、書生さんなぞは、

（婆さん、子は要らんが、女親を一つ寄越せ。）

なんて、おからかひなされまする。

其(それ)を見(み)い／＼知(し)つて居(ゐ)て、此(こ)の嘉吉(かきち)の狂人(きちがひ)が、如(い)何(か)な事(こと)、私(わし)があげましたものを召食(めしあが)らうとするのを見(み)て、石(いし)ぢや、と云(い)ふのでござりますよ。」

四

「それではお婆さん樂隠居だ。孫子が嘸大勢あんなさらうね。」

と小次郎法師は、話を聞き／＼、子産石の方を覗きたれば、面白や浪の、云ふことも上の空。トお茶注しませうと出しかけた、塗盆を膝に伏せて、不圖黙つて、姥は寂しさうに傾いたが、

「何のお前様、此の年になりますまで、孫子の影も見はしませぬ。爺殿と二人切で、雨のさみしさ、行燈の薄寒さに、心細う、果敢ないにつけまして、小兒衆を欲しがるお方の、お心を察しますで、なう、子産石も一つ一つ、信心して進じます。

長い月日の事でござりますから、里の人たちは私等が事を、人に子だねを進ぜるで、二人が實を持たぬのぢや、と云ひますがの、今ではそれさへ本望で、せめてもの心ゆかしでござりまずよ。」

とかごとがましい口ぶりだつたが、柔和な顔に顰みも見えず、温順に莞爾して、

「御新造様がおありなさりまずれば、御坊様にも一かさね、子産石を進ぜませうに・・・・・・」

「飛でもない。此の團子でも石になれば、それで村方勧化でもしやうけれど、生憎三界に家なしです。しかし今聞いたやうでは、嘸お前さんがたは寂しからうね。」

「はい、はい、否、御坊様の前で申しましては、お追従のやうでござりますが、佛様は御方便、難有いことでござります。恁うやつて愛想氣もない婆々が許でも、お休み下さります御人たちに、お茶のお給仕をして居りますれば、何や彼や賑やかで、世間話で、ついうか／＼と日を暮らしますでござります。」

「あゝ、もし／＼、」

と街道へ、

「休まつしやりまし。」と呼びかけた。

車輪の如き大さの、紅白段々の夏の蝶、河床は草にかくれて、清水のあとの土に輝く、山際に翼を廻すは、白の脚絆、草鞋穿、かすりの單衣のまくり手に、其の看板の洋傘を、手拭持つ手に差翳した、三十ばかりの女房で。

あんぺら帽子を阿彌陀かぶり、縞の襯衣の大膚脱、赤い團扇を帯にさして、手甲、甲掛嚴重に、荷をかついで續くは亭主。

店から呼んだ姥の聲に、女房が一寸會釋する時、束髪の鬢が戰いで、前を急ぐか、其まゝ通る。

前帯をしやんとした細腰を、廂にぶらさがるやうにして、綻びた脇の下から、狂人の嘉吉は、きよろりと一目。

ふら／＼と霞簀を離れて、早や六七間行過ぎた、女房のあとを、すた／＼と跣足の砂路。

ほこりを黄色に、ぱつと立てゝ、擦寄つて、附着いたが、女房の其の洋傘から伸かゝつて見越入道。

「イヒヒ、イヒヒヒ、」

「これ、惡戯をするでないよ。」

と姥が爪立つて躾めたのと、笑聲が、殆ど一所に小次郎法師の耳に入つた。

恰も爾時、亭主驚いたか高調子に、

「傘や洋傘の繕ひ！ー洋傘張替繕ひ直し・・・・・」

蝉の鳴く音を貫いて、誰も通らぬ四邊に響いた。

隙さず、這般不氣味な和郎を、女房から押隔てゝ、

荷を眞中へ振込むと、流眄に一睨み、直ぐ、急足になるあとから、和郎は、のそ／＼ー大な影を引いて續く。

「御覽じまし、あの通り困つたものでこざります。」

法師も言葉なく見送るうち、沖から來るか、途絶えては、づしりと崖を打つ音が、松風と行違ひに、向うの山に三度ばかり浪の調べを通はすほどに、紅白段々の洋傘は、小さく鞠のやうになつて、人の頭が入交ぜに、空へ突きながら行くかと見えて、一條道の其處までは一軒の苫屋もない、彼方大崩壞の腰を、點々

五

「あれ、あの大崩壊の崖の前途へ、皆が見えなくなりました。丁ど、あれを出ました、下の濱でございます。唯今の狂人が、酒に醉つて打倒れて居りましたのは・・・・・はい、あれは嘉吉と申しまして、私等、秋谷在の、いけずな野郎でございましての。

其飲んだくれます事、怠ける具合、まともな人間から見ますれば、眞に正気の沙汰ではございませんだが、それでも何うやら人並に、正月はめでたがり、盆は忙しがりまして、別に氣か觸れた奴ではございません。何時でも村の御祭禮のやうに、遊ぶが病氣でございましたが、此の春頃に、何と發心をしましたか、自分が望みで、三浦三崎の然る酒問屋へ、奉公をしたでございます。

つい夏の取着きに、御主人のいひつけで、清酒をの、お前様、澤山でもございませぬ。三樽ばかり船に積んで、船頭殿が一人、嘉吉めが上乗りで、此の葉山の小賣店へ卸しに來たでございます。

葉山森戸などへ三崎の方から歸りまず、此の邊の

お百姓や、漁師たち、顔を知つたものが、途中から、乗けてくらつせえ、明いてる船ぢや、と渡場でも船つきでもござりませぬ。海岸の岩の上や、磯の松の樹の根方から、おゝい／＼、と坂東聲で呼ばり立つて、とう／＼五人が處押込みましたは、以上七人になりました、よの。

どれも／＼、碌でなしが、得手に帆ぢや。船は走る、口は辷る、凪はよし、大話しを為草臥れ、嘉吉めは胴の間の横木を枕に、踏反返つて、ぐう／＼高鼾になつたげにござります。

路に灘はござりませぬが、樽の香が芬々して、鮹も浮きさうな凪の好さ。せめて船にでも酔ひたい、と一人が串戯に言ひ出しますと、何と一樽賭けまいか、飲むことは銘々が勝手次第、勝負の上から代銭を拂へば可い、面白い、遣るべいぢや。

煙管の吸口でゞも結構に樽へ穴を開ける徒が、大びらに呑口切つて、お前様、お船頭、辨當箱の空はなしか、といびつ形の切溜を、大海でざぶりとゆすいで、その皮づゝみに、せゝり殘しの、醤油かすを指のさきで嘗めながら、まはしのみの煽切。

天下晴れて、財布の紐を外すやら、胴巻を解くや

らして、賭博をはじめますと、お船頭が默つては居りませぬ。」

「叱言を云つて留めましたか。さすがは船頭、字で書いても船の頭だね。」

と眞顔で法師の言ふのを聞いて、姥は、いかさまな、其の年少で、出家でもしさうな人、と然も憐むだ趣で、

「まあ、お人の好い。なるほど船頭を字に書けば、船の頭でござりましよ。そりや最う船の頭だけに、極り處は丁と極つて、間違ひのない事をいたしました。」

「何うしたかね。」

「五人徒が賽の目に並んで居ります、眞中へ割込んで、先づ帆を下ろしたのでござります。」

と莞爾して顔を見る。聊も其の意を得ないで、

「何故だらうかね。」

「此の追手ぢや、帆があつては、丁と云ふ間に葉山へ着く。ふは／＼と海月泳ぎに、船を浮かせながらゆつくり遣るべい。

其の事よ。四海波静かにて、波も動かぬ時津風、枝を鳴らさぬ御代なれや、と勿體ない、祝言の小謡

を、聞囓りに謳ふ下から、勝負！とそれ、銭の取遣り。板子の下が地獄なら、上も修羅道でござりまず。」

「船頭も同類かい、何つて、苦笑ひをするのであつた。

「それはお前様、あの徒と申しますものは、・・・・・・まあ、海へ出て岸をば〓して御覧じまし。巖の窪みは何處も彼處も、賭博の壷に、鰒の蓋。蟹の穴でない處は、皆意銭のあとでこざります。珍らしい事も、不思議な事もないけれど、爾時のは、はい、嘉吉に取つては、あやかしが着きましたぢや。なう、便船せう、便船せう、と船を渚へ引寄せては、巖端から、松の下から、翻然々々と乗りましたのは、魔がさしたのでござりましたよ。」

六

魅入られたやうになりまして、ぐつすり寝込みました嘉吉の奴。浪の音は耳馴れても、磯近へ舳が廻つて、松の風に揺り起され、肌寒うなつて目を覺ましますと、其のお前様……體裁。

山へ上つたと云ふではなし、たか／＼船の中の車座、そんな事は平氣な野郎も、酒樽の三番叟、たうとうたらり／＼には肝を潰して、（やい、此區奴等、）とはずみに引傾がります船底へ、仁王立に踏ごたへて、喚いたさうにござります。

騒ぐな。

騒ぐまいてや、やい、嘉吉、恁う見た處で、二歩と一両、貴様に貸のない顔はないけれど、主人のものぢや。引負をさせてまで、勘定を合はせうなんど因業な事は言はぬ。場錢を集めて一樽買つたら言分あるまい。代物さへ持つて歸れば、何處へ賣つても仔細はない。

なるほど言はれゝば其通り、言譯の出來ぬことはござりませぬは、なう。

錢さへ拂へば可いとして、船頭やい、船は何うする、と嘉吉が云ひますと、ばら錢を掴つた拳を向顱巻の上さ突出して、半だ半だ、何、船だ。船だ／＼、と夢中で居ります。

嘉吉が、其處で、はい、櫓を握つて、ぎつちらこ。幽靈船の歩に取られたやうな顔つきで、漕出したげでござりますが、酒の匂に我慢が出來ず……御繁盛の旦那から、一杯おみきを遣はされ、と咽喉をごく／＼さして、口を開けるで、さあ、飲まつせえ、と注ぎにかゝる、と幾干か差引くか、と念を推したげで、なう、此處等は確でこざりました。

幡随院長兵衛ぢや、酒を振舞うて錢を取るか。しみつたれたことを云ふな、と勝つた奴がいきります。お手渡で下される儀は、皆の衆も御面倒、是へ、と云うて、あか柄杓を突出いて、だふ／＼と受けました。あの大面が、お前様、片手で櫓を、はい、押しなから、其の馬干杓のやうなもので、片手で、ぐい／＼と煽つたげな。

酒は一樽打抜いたで、些とも惜氣はござりませぬ。海からでも湧出すやうに、大氣になつて、もう一つやらつせえ、丁だ、それ、心祝ひに飲ますべい、代

は要らぬ。
歸命頂禮、賽ころ明神の兀天窓、光る／＼、と追従云うて、あか柄杓へ又一杯、煽るほどに飲むほどに、櫓拍子が亂になつて、船はぐら／＼大揺れ小揺れぢや。こりやならぬ、賽が据らぬ。
えゝ氣に入らずば代つて漕げさ、と滅多押しに、それでも、大崩壊の鼻を廻つて、出島の中へ漕ぎ入れたでござります。
さあ、内海の青畳、座敷へ入つたも同じぢや、と心が緩むと、嘉吉奴が、酒代を渡してくれ、勝負が濟むまで内金を受取らう、と櫓を離した手に錢を握ると、懐へでも入れることか、片手に、あか柄杓を持つたなりで、チヨポ一の中へ飛込みましたが。
はて、河童野郎、身投するより始末の惡さ。恁うなつては、お前様、もう浮ぶ瀬はござりませぬ。
取られて取られて、たうとう、なう、御主人へ持つて行く、一樽のお代を無にしました。處で、自暴ぢや。賽の目が十に見えて、わいらの頭が五十ある、濱がぐる／＼廻るわ廻るわ。さあ漕がば漕げ、殺さば殺せ、と又ふんぞつた時分には、ものゝ一斗ぐら

ゐ嘉吉一人で飲んだであろ。七人のあたまへ四斗樽、是があらかた片附いて、濱へ樽を上げた時、重いつもりで両手をかけて、えい、と腰を切つた拍子抜けに、向うへのめつて、樽が、ばつちやん、嘉吉がころり、どんとのめりました切、早や死んだも同然。船はそれまで、ぐるり／＼と長者園の浦を廻つて、丁どあの、活動寫眞の難船見たやう、波風の音もせずに漂うて居ましたげな。兩膚脱の胸の毛や、大胡坐の脛の毛へ、夕風か颯とかゝつて、慄然として、皆が少し正気づくと、一ツ星も見えまする。大巖の崖が薄黒く、目の前へ蔽被さつて、物凄うもなりましたので、褌を緊め直すやら、膝小僧を合はせるやら、お船頭が、ほういほうい、と鳥のやうな懸聲で、濱へ船をつけまして、正體のない嘉吉を撲ぐる。と、むつくり起きたが、其の酒樽の軽いのに、本性違はず氣落ちがして、右の、倒れたものでござりますよ。はい。」

七

「仰向状に、火のやうな息を吹いて、身體から染出します、酒が砂へ露を打つ。晩方の涼しさにも、蚊や蠅が寄つて來る。

奴は、打つても、叩いても、起ることではござりませぬがの。

かゝり合は免れぬ、と小力のある男が、力を貸して、船頭まじりに、此の徒とて確ではござりませなんだ。ひよろ／＼しながら、あとの先づ二樽は、荷つて小賣店へ届けました。

嘉吉の始末でござります。其なり船の荷物にして、積んで歸れば片附きますが、死骸ではない、醉つたもの、醒めた時の挨拶が厄介ぢや、とお船頭は遁を打つて、帆を掛けて、海の靄へと隠れました。

何の道譯を立ていでは、主人方へ歸られる身體ではござりませぬで、一先づ、秋谷の親許へ届ける相談にかゝりましたが、又此のお荷物が、御覧の通りの大男。それに、はい、のめつた切、捏でも動かぬに困じ果てゝ、すつぱ／＼煙草を吹かすやら、お前

様、嘘をずるやら、向脛へ集る蚊を踵で揉殺すやら、泥に醉つた大鮫のやうな嘉吉を、浪打際に押取卷いて、小田原評定。持て餘して居りました處へ、丁ど荷車を曳きまして、藤澤から一日路、此の街道つゞきの、長者園の土手へ通りかゝりましたのが

こ・・・・・」

　茜色の顱卷を、白髪天窓にちよきり結び。結び目の押立つて、威勢の可いのが、辨慶蟹の、濡色あかき鋏に似たのに、又た其の左の腕片々〳〵、へし曲つて脇腹へ、ばツと開け、ぐいと握る、指と掌は動くけれども、肱は附着いて些とも伸びず。鋼で鑄たやうな。……其の仔細を尋ぬれば、心がらとは言ひながら、去る年、一膳飯屋でぐでんになり、冥途の宵を照らしますぢや、と碌でもない秀句を吐いて、井桁の中に横木瓜、田舍の暗夜には通りものゝ提灯を借りたので、蠣殼道を照らしながら、安政の地震に出來た、古い處を、鼻唄で、地が崩れさうなひよろ／＼歩行き。好い心持に眠氣がさすと、邪魔な灯を肱にかけて、腕を鍵形に両手を組み、ハテ怪しやな、汝、人魂か、金精か、正體を顯せろ！とトロンコの据眼で、提灯を下目に睨む、とぐたりとなつた、

並木の下。地蟲のやうな鼾を立てつゝ、大崩壊に差懸ると、海が變つて、太平洋を煽る風に、提灯の臘が倒れて、めらくと燃えついた。沖の漁火を袖に呼んで、胸毛がぢり／＼に仰天し、やあ、コン畜生、火の車め、まだ疾え、と鬼と組んだ横倒れ、轉廻つて揉消して、生命に別條はなかつた。が、其時の大火傷、享年六十有七歳にして、生れもつかぬ不具ものー一渾名を、てんぼう蟹の宰八と云ふ、秋谷在の名物親仁。

「・・・・・私が爺殿でこざります。」

と姥は・云つて微笑んだ。

小次郎法師は、壽く如く一揖して、

「成程、尉殿だね。」と祝儀する。

「否、最う氣まゝものゝ碌でなしでござりますか、お庇さまで、至つて元氣がようござりますので、御懇意な近所へは、進退が厭ぢや、となう、葉山を越して、日影から、田越逗子の方へ、速くまで、てんぼうの肩に背負籠して、栄螺や、とこぶし、もろ鯵の開き、うるめ鰯の目刺など持ちましては、飲代にいたしますが、其時はお前様、村のもとの庄屋様、代々長者の鶴谷喜十郎様、」

と丁寧に名のりを上げて、

「これが私ども、お主筋に當りましての。其のお邸の御用で、東海道の藤澤まで、買物に行つたのでござりました。一月に一度ぐらゐは、種々入用のものを、鹽やら醤油やら、小さなものは洋燈の心まで、一車づゝ調へさつしやります。

横濱は西洋臭し、三崎は品が落着かず、界隈は間に合はせの俄仕入れ、しけものが多うござりますので、何うしても目量のある、づゝしりしたお堅いものは、昔からの藤澤に限りますので、おねだんも安し、徳用向きゆゑ、御大家の買物は又別で、」

と姥は絲を繰るやうな話しぶり。心のどかに口をまはして、自分も又お茶參つた。

しばらく往來もなかつたのである。

八

「・・・・・おう、宰八か。お爺、在所へ歸るだら、此さ一個、産神様へ届けてくんな。丁どはい、其の荷車は幸だ、と言はつしやる。見ると、お前様、嘉吉めが、今申した其の體でこざりましよ。

同じ産神様氏子夥間ぢや。承知なれど、私はこれ、手が此の通り、思ふやうに荷が着けられぬ。御身たちあんばいよう直さつしやい、荷の上へ載せべい、と爺どのが云ひまずとの。

何お爺い、其まゝ上へ積まつしやい、と早や二人して、嘉吉めが天窓と足を、引立てるではござりませぬか。

爺どのが、待たつしやい、鶴谷様のお使ひで、綿を大いこと買うて來たが、醤油樽や石油鑵の下積になつては惡かんべいと、上荷に積んであるもんだ。喜十郎旦那が許で、ふつくりと入れさつしやる綿の初穂へ、其の酒浸しの怪物さ、押ころばしては相成んねえ、柔々積方も直さつしやい、と・利かぬ手の拳を握つて、一力味力みましけ。

七面倒な、恁うすべい、と荒稼ぎの氣短徒ぢや。お前様、上かゞりの縄の先を、嘉吉か胴中へ結へ附けて、車の輪に障らぬまでに、横づけに縛りました。

賃錢の外ぢや、落しても大事ない。然らば急いで歸らつしやれ。しやん／＼と手を拍いて、賭博に勝つたものも、負けたものも、飲んだ酒と差引いて、誰も損はござりませぬ。可い機嫌のそゝり節、尻まで捲つた脛の向く方へ、ぞろ／＼散つたげにござります。

爺どのは、どつこいしよ、と横木に肩を入れ直いて、てんぼうの片手押しは、胸が力でござります。人通りが少いで、露にひろがりました濱晝顔の、ちら／＼と咲いた上を、ぐいと曳出して、それから、がた／＼。

大崩まで葉山からは、だら／＼の爪先上り。後はなぞへに下り道。車がはずんで、ごろ／＼と、私が此の茶店の前まで參つた時ぢや、と……申します。

やい、枕をくれ、枕をくれ、と嘉吉めが喚くげな。

何吐すぞい、此の野郎、贅澤、べいこくなてえ、狐店の白ツ首と間違へてけつかるさうな、とぶつ／＼口叱言を申しましての、爺どのが振向きもせずに、

ぐん／＼曳いたと思はつしやりまし。」

「何か、夢でも見たらうかね。」

「夢處でござりまずか、お前様、直ぐに縊殺されさうな聲を出して、苦しい、苦しい、鼻血が出るわ、目がまふわ、天窓を上へ上げてくれ。やい、何うするだ、さあ、殺さば殺せ、漕がば漕げ、と未だ夢中で、嘉吉めは船に居る氣で居ります、よの。

胴中の縄が弛んで、天窓が地へ擦れ／＼に、倒になつて居りますさうな。こりや最ぢや、なう、たつての苦脳。

酒が上つて、醒めずに居たりや本望だんべい、俺ら手が利かねえだに、最些とだ辛抱せろ、とぐら／＼と揺り出しますと、死ぬる、死ぬる、助け船引と火を吹きさうに喚いた、となう。

此の中ではござりませぬ、」

と姥は葦簀の外を見て、

「廂の蔭ぢやつたげにござります。浪が届きませぬばかり。低い三日月様を、漆見たやうな高い髷からはづさつせえまして、眞白なのを顔に當てゝ、團扇が衣服を掛けたげな、影の涼しい、姿の長い、裾の薄蒼い、慄然とするほど美しらしいお人が一方。

すら／＼道堀へ出さつせての、

（・・・・・・・・・・）

爺どのを呼留めて、是は罪人かーーと問はしつけえよ。食物も代物も、新しい買物ぢや。縁起でもない事の。罪人を上積みにして何う為べい、是々／＼でこざる。と云ふと、可哀相に苦しからう、と團扇を取つて、薄い羽のやうに、一文字に、横に口へ銜へさしつた。

其時は、爺どのゝ方へ背を向けて、顔を恁う斜つかひに、」

と法師から打背く、と俤の其の薄月の、婦人の風情を思遣ればか、葦簾をはづれた日のかげりに、姥の頸が白かつた。

荷物の方へ、する／＼と膝を寄せて、

「其處で？」

「はい、両手を下げて、白い其の兩方の掌を合はせて、がつくりとなつた嘉吉の首を、四五本目の輻の邊で、上へ支げて持たつせえた。おもみが掛つたか、姿を紋つて、肩が細りしましたげなよ。」

九

「介抱しやう、お下ろしな、と言はつしやる。其の位な荒療治で、寝汗一つ取れる奴か。打棄つて置か

つせえ。面倒臭い、と顱巻しめた頭を掉つて云うたれば、何處まで行く、と聞かしつけえ。途中さま／＼の隙ざへで、爺どのもむかつぱらぢや、秋谷鎮座の明神様、俺等が産神へ届け物だ、とづゞきり饒舌ると、

（受取りませう、此處で可いから。）

（お前様は？）

（あゝ、明神様の侍女よ。）と言はつしやつた。

月に浪が懸りますやうに、さら／＼と、風か吹きますと、揺れなから此の葦簀の蔭が、格子縞のやうに御袖へ映つて、雪の膚まで透通つて、四邊には影もない。中空を見ますれば、白鷺の飛ぶやうな雲か見えて、ざつと一浪打ちました。爺どのは慄然として、はい、はい、と柔順になつて、縄を解くと、づりこけての、嘉吉のあの圖體が、どたりと荷車から。貴女は擡げた手を下へ、地の上へ着けるやうに、嘉吉の頭を下ろさつせえた。足をばた／＼の、手によい／＼、輻も蹴はづしさうに悶きますわの。

（あゝお前は最う可いから。）

邪魔ものゝやうにおつしやつたで、爺どのは心外ぢや・・・・・何の、心外がらずとものの、いけずな親

仁でござりますかの、ほゝ、ほゝ。」

「否、いや、私か聞いたゞけでも、何か、恁う故と邪險に取扱つたやうで、對手が其の醉漢を勞ると云ふだけに、默つては居られません。何だか寢覺か惡いやうだね。」

「えゝ、串戲にも、氏神様の知己ぢやと言はつしやりましたけに、嘉吉を荷車に縛りましたのは、明神様の同一孫兒を、継子扱ひにしましたやうで、貴女へも聞えが惡うござりますので。綿の上積一件から荷に奴を縛つたは、爺どのが自分したではない事を、言譯がましく饒舌りますと、

（可いから、お前は彼方へ、）と、恁うぢやとの。

（可かあねえだ。もの、理合を言はねえ事にや、ハイ氣が濟みましねえ。お前様も明神様お知己なら聞かつしやい。老耄の手ほう爺に、若いものゝ酔漢の介抱が何、出來べい。神様も分らねえ、こんな、くだま野郎を勞つて遣らつしやる御慈悲い深い思召で、何でこれ、私等婆様の中に、小兒一人授けちやくれさつしやらぬ。其も可い、無い子だねなら断念めべいが、提灯で火傷をするのを、何で、默つて見てご

ざつた。私が手ぼうでせえ無くば、おなじ車に結へるちゆうて、恁う、けんどんに、倒にや縛らねえだ。初對面のお前様見さつしやる目に、えら俺か非道なやうで、寝覺が惡い、）と顱卷を掉立てますと、なう。

（早く、お歸り、）と、継穂がないわの。

（いんにや、理を言はねえぢや、）とまだ早や一概に捏ねようとしましたら・・・・

（おいでよ、）と、お前様ね。團扇で顔を隠さしつたなり、背後へ雪のやうな手を伸して、荷車ごと爺どのを、推遣るやうにさつせえた。お手の指が白々〳〵と、恁う輻の上で、絲車に、はい、綿屑がかゝつたげに、月の光で動いたらばの、ぐるぐるぐると輪が廻つて、爺どのゝ背へ、荷車が、乘被さるではござりませぬか。」

「おゝおゝ、」

と、法師は目を瞠つて固唾を呑む。

「吃驚亀の子、空へ何と、爺どのは手を泳がせて、自分の曳いた荷車に、ぐわら／＼背後から推出されて、わい、というた切、一呼吸に村の取着き、あれから、此の街道が鍋づる形に曲ります、明神様、森

の石段まで、ひとりでに駆出しましたげな。尤も見さつしやります通り、道はなぞへに、向へ低くはなりますが、下り坂と云ふ程ではなし、其の疾いこと。一なだれに、辷つたやうで、漸と石段の下で、うむ、とこたへて踏留まりますと、はずみのついた車めは、がた／＼と石ころの上を空廻りして、躍つたげにござります。見上げる空の森は暗し、爺どのは、身震ひをしたと申しますがの。」

十

「利かぬ氣の親仁ぢや、お前様、月夜の遠見に、纏つたもの丶形は、葦簀張の柱の根を厭へて置きます、お前様の背後の、其の石碑か。私が立掛けて置いて歸ります、此の床几の影ばかり。

大崩壊まで見通しになつて、貴女の姿は、蜘蛛巣ほども見えませぬ。其をの、透かし／＼、山際に附着いて、薄墨引いた草の上を、跫音を盗んで引返しましたげな。

嘉吉を何う始末さつしやるか、其を見届けよう、と云ふ、爺どの了簡でござります。

荷車はの、明神様石段の前を行けば、御存じの三崎街道、横へ切れる畔道が在所の入口でござりまずで、其處へ引込んだものでござりまず。人氣も穏なり、積んだものを見たばかりで、鶴屋様御用、と札の建つたも同一ぢやで、誰も手の障へ人はござりませぬで。

爺どのは、這ふやうにして、身體を隱して引返したと言ひましけ。能う姿が隱されう、光つた天窓と、顱卷の茜色が月夜に消えるか。主や其處で早や、貴女の術で、活きながら鋏の紅い月影の蟹に成つた、とあとで村の衆にひやかされて、えゝ、措けやい、氣味の惡い、と目をぱちくり、泡を吹いたでございますよ。

笑うて遣らつしやりませ。いけ年を仕つて、貴女が、去ね、とおつしやつたを止せば可いことでございます。」

法師は恁くと聞いて眉を顰め、

「笑ひ事ではない。何かお爺様に異狀でもありましたか。」

「お目こぼしでございます、」

と姥は謹んだ、顏色して、

「爺どのはお庇と何事もございませんで、今日も鶴谷様の野良へ手傳ひに參つて居ります。」

「ぢや、其の嘉吉と云ふのばかりが、變な目に逢つたんだね。」

「其も心がらでございます。はじめはお前様、貴女か御親切に、勿體ない・・・・・お手づから薫の

高い、水晶を噛みますやうな、涼しいお藥を下さつて、水ごと殘して置きました、・・・・・此の手桶から、」・・・・・

と姥は見返る。捧げた心か、葦簀に挾んで、常夏の花のあるが下に、日影涼しい手桶が一個、輪の上に、ー一大方其時以來であらうー一注連を張つたが、まだ新しい。

「水も汲んで、くゝめてお遣り遊ばした。嘉吉の我に返つた處で、心得違ひをしたゝめに、主人の許へ歸れずば、是を代に言譯して、と結構な御寶を。・・・・・

其がお前樣、眞緑の、光のある、美しい、珠ぢやつたげにござります。

爺どのが、潜り込んだ草の中から、其の蟹の目を密と出して、見た時ぢやつたと申します。

かう、貴女がお持ちなさりました指の尖へ、ほんのりと蒼く映つて、白いお手の透いた處は、大な螢をも撮みなさりましたやうぢやげな。

貴女のお身體に附屬て居てこそぢやか、やがて、はい、其の光は、嘉吉が賽ころを振る掌の中へ、消えましたとの。

其から、抜かつしやりましたものらしい、少し俯向いて、えゝ、矢張、顔へは團扇を當てたまんまで、お髪の黒い、前の方へ、輕く簪をお挿なされて、お草履か、雪駄かの、其なりに、はい、すら／＼と、月と一所に女浪のやうに歩行かつしやる。

是で又爺どのは悚然としたげな。なう、如何な事でも、明神様の知己ぢや言はしつたは串戯で、大方は、葉山あたりの誰方のか御別荘から、お忍びの方と思はしつけがの。

今行かつしやるのは反對に秋谷の方ぢや。・・・・・はてな、と思ふと、變つた事は、其ばかりではござりませぬよ。

嘉吉の奴がの、あらう事か、慈悲を垂れりや、何とやら。珠は掴む、酒の上ぢや、はじめは唯、御恩返しぢやの、お名前を聞きたいの、唯一目お顔の、とこだはりましけ。柳に受けて歩行かつしやるで、機織場の姉やが許へ、夜さり、畦道を通ふ時の高聲の唄のやうな、眞似もならぬ大口利いて、果は増長此の上なし、袖を引いて、手を廻して、背後から抱きつきをる。

爺どのは冷汗掻いたげな。や、それでも召ものゝ

裾に、草履が引かゝりましたやうに、する／＼と嘉吉に抱かれて、前ざまに行かつしやつたさうながの、お前様、飛んでもない、」

「怪しからん事をー一又したもんです。」

と小次郎法師は苦り切る。

十一

姥は分別あり顔に、

「一目見たら、其の御容子だけでなりと、分りさうなものでござります。貴女が神にせよ、又人間にしました處で、嘉吉づれが口を利かれます御方ではござりませぬ。

然うでなくとも、そんな御恩を被つたでござりますもの。拝むにも、後姿でなうては罰の當ります處、悪党なら、お前様、發心の為處を。

根が悪徒ではござりませぬ、取締りのない、唯ばうと、一夜酒が沸いたやうな奴殿ぢや。薄も、蘆も、女郎花も、見境はござりませぬ。

髪が長けりや女ぢや、と合點して、さかりのついた犬同然、珠を頂いた御恩なぞも、新屋の姉えに、薮の前で、牡丹餅半分分けて貰うた了簡ぢやで、なう、食物も下されば、お情も下されうぐらゐに思うで、こびりついたでござります。

辨天様の御姿にも、蠅がたかれば、お鬱陶しい。

通りゞかりに唯見ては、草がくれの路と云うても、

旱に枯れた、岩の裂目とより見えませぬが、」

姥は腰を掛けたまゝ。さて、乗出すほどの距離でもなかつたーー

「直き其の、向う手を分け上りますのが、山一ツ秋谷在へ近道でござりまして、馬車こそ通ひませぬけれども、私などは夜さり店を了ひまするとお菓子、水菓子、商物だけを風呂敷包、ト背負ひまして、片手に藥罐を提げたなりで、夕焼にお前様、影をのび／＼長々と、曲つた腰も、樂々小屋へと歸りますがの。

貴女は其處へ。・・・・・お裾が靡いた。

是は不思議、と爺どのが、肩を半分乗出す時ぢや、お姿が波を離れて、山の腹へすらりと高うなつたと思ふと、はて、何を嘉吉がしくさりましたか。

屹と振向かつしやりました様子ぢやつけ、お顔の團扇が飜然と翻つて、斜に浴びせて、嘉吉の横顔へびしりと來たげな。

きやつ！と云ふと刎返つて、道ならものゝ小半町、膝と踵で、抜いた腰を引摺るやうに、其癖、怪飛んで遁げて來る。

爺どのは爺どので、息を詰めた汗の處へ、今のき

やあ！で轉倒して、わつと云うて山の根から飛出す處へ、胸を頭突に來るやうに、ドンと嘉吉が打附つたので、兩方へ間を置いて、此の街道の眞中へ、何と、お前樣、見られた圖でござわまずか。

二人とも尻餅ぢや。（何、何うした野郎、）と小腹も立つ、爺どのが恐怖紛れに、がならつしやると、早や、變でこざりましたげな、きよろん、とした眼の見据ゑて、私が爺の宰八の顏をじろり。

（ば、ば、ば、）

（えゝ！）

（怪物！）と云ふかと思ふと、ひよいと立つて、又ばた／＼と十足ばかり、駆戻つて、うつむけに突んのめつたげにこざりまして、なう。

爺どのは二度吃驚、起ちかけた膝が又がつくりと地面へ崩れて、ほつと太い呼吸さついた。くわつと成つて浪の音も聞えませぬ。其で居てーー寂然として、海ばかり動きます耳に響いて、秋谷へ近路の其の山づたひ。鈴虫が音を立てると、露が溢れますやうな、佳い聲で、そして物凄う、

（此處は何處の細道ぢや、

細道ぢや。

天神さんの細道ぢや、
細道ぢや。
少し通して下さんせ、下さんせ。）

とあはれに寂しく、貴女の聲で聞えました。
其の聲が遠くなります、山の上を、薄綿で包みますやうに、雲か白くかゝりますと、音が先へ、颯あーーとたよりない雨か、海の方へ降つて來て、お聲は山のうらかけて、遠くなつて行きますげな。
前刻見た兎の毛の雲ぢや、一雨來ようと思うた癖に、こりや心ない、荷が濡れよう、と爺どのは駈けて戻つて、ぐわツたり車を曳出しなから、村はづれの小店から先づ聲をかけて、嘉吉めを見せにやります。何か、其の唄のお聲が、なう、十年五十年も昔聞いたやうにもあれば、かう云ふ耳にも、響くと云ひます。
遠慮すると見えまして、餘り委しい事は申しませぬが、嘉吉はそれから、あの通り氣が變になりました。
さあ、界隈は評判で、小兒どもが誰云ふとなく、何時の間やら、其の唄を・・・・・」

十二

（此處は何處の細道ぢや、
細道ぢや。
秋谷邸の細道ぢや、
細道ぢや。
少し通して下さんせ、
下さんせ。
誰方が見えても通しません、
通しません。）

「あの、かう唄ふではござりませんか。當節は、もう學校で、かあ／＼鴉が鳴く事の、池の鯉が麸を食ふ事の、と間違ひのないお前様、ちやんと理の詰んだ唄を教つしやるに、其を皆が唄はいで、今申した――

（此處は何處の細道ぢや、
秋谷の邸の細道ぢや。）

とあはれな、寂しい、細い聲で、口々に、小兒同士、顔さへ見れば唄ひ連れるでござりますか、近頃は久しい間、打絶えて聞いたこともござりませぬ――

此の唄を爺どのが其晩聞かしりた、と云、ふ話以來、ーー誰云ふとなく流行りますので。

其も、なう元唄は、

（天神様の細道ぢや、

少し通して下さんせ、

御用のない人通しません、）

確か、かうでござりませう。其を、

（秋谷邸の細道ぢや、

誰方が見えても通しません、

通しません。）

とひとりでに唄ひます、の。まだ其ばかりではござりません。小兒たちが日の暮方、其處らを遊びますのに、厭な眞似を、まあ、何うでござりませう。

てん／＼が芙萸の葉を捩ぎりまして、目の玉二つ、口一つ、穴を三つ開けたのを、ぬつぺりと、かう顔へ被つたものでござります。大いのから小さいのから、其の蒼白い筋のある、細ら長い、狐とも狸とも、姑獲鳥、とも異體の知れぬ、中にも蟲喰のござります葉の汚點は、癩か、痘痕の幽靈。面を竝べて、ひよろ／＼と蔭日向、藪の前だの、谷戸口だの、山の根なんぞを練りながら今の唄を唄ひますのが、三人

と、五人づゝ、一組や二組ではござりませんで。
惡戯が蒿じて、此の節では、唐黍の毛の尻毛を下げたり、あけげを口に銜へたり、茄子提灯で闇路を辿つて、日が暮れるまでうろつきますわの。
氣に成るのは小石を合せて、手ん手に四ツ竹を鳴らすやうに、カイカイカチカチと拍子を取つて、唄が段々身に染みますに、皆か家へ散際には、一人がカチ／＼石を鳴らして、
（今打つ鐘は、）と申しますと、
（四ツの鐘ぢや、）
と一人がカチカチ、五ツ、六ツ、九ツ、八ツと数へまして・・・・・
（今打つ鐘は、
七ツの鐘ぢや。）
と云ふのを合圖に、
（そりや魔が魅すぞ！）
と哄と囃して、消えるやうに、残らず居なくなるのでござりますか。
何とも厭な心持で、、うね寂しい、丁ど盆のお精霊様が絶えず其處らを歩行かつしやいますやうで、氣の滅入りますことゝ云うては、穴倉へ引入れられ

さうでござります。

活溌な唱歌を唄へ。あれは何だ、と學校でも先生様が叱らしやりますさうなが、それで留めまずほどならばの、學校へ行く生徒に、蜻蛉釣るものも居りませねば、木登りをする小僧もない筈ーー一向に留みませぬよ。

内は内で親たちが、厳しく叱言も申します。氣の強いのは、おのれ、凸助……いや、鼻ぴつしやり、芙萸の葉の凹吉め、細道で引捉まへて、張撲つて懲さう、と通りものを待構へて、恁う透かして見ますがの、脊の高いのから順よく竝んで、同一やうな芙萸の葉を被つて居るけに、衣ものゝ縞柄も氣の所為か、逢魔が時に茫として、庄屋様の白壁に映して見ても、どれが孫やら、悴やら、小女童やら分りませぬ。

おなじやうに、憑物がして、魔に使はれて居るやうで、手もつけられず、親たちがうろ／＼しますの。村方一同寄ると障ると、立膝に腕組するやら、平胡坐で頬杖つくやら、變ぢや、希有ぢや、何でもたゞ事であるまい、と薄氣味を惡がります。

中でも、ほツと溜息ついて、氣に掛けさつしやつ

たのが、鶴谷喜十郎様。」
と丁寧に、又名告つて、姥は四邊を見たのである。

十三

さて十年の馴染のやうに、擦寄つて聲を竊め、

「童唄を聞かつしやりましーー（秋谷邸の細道ぢや、誰方が見えても通しません）ーーと、の、それ、」

小次郎法師の頷くのを、合點させたり、と熟と見て、姥はやがて打頷き、

「・・・・・でござりませう。先此の秋谷で、邸と申しますればーーそりや土藏、白壁造、瓦屋根は、御方一軒ではござりませぬが、太閤様は秀吉公、黄門様は水戸様でなう、邸は鶴谷に歸したもの。

處で一軒は御本宅、こりや村の草分でござりまずが、最う一軒ーー喜十郎様が隱居所にお建てなされた、御別荘がござりましての。

お金は十分、通ひ廊下に藤の花を咲せうと、西洋窓に鸚鵡を飼はうと、見本は直き近い處にござりまして、思召通りぢやけれど、昔氣質の堅い御仁、我等式百姓に、別荘づくりは相應はしからぬ、とつい此のさきの立石在に、昔からの大庄屋が土臺ごと賣

物に出しました、瓦ばかりも小千兩、大黒柱か二抱へ。平屋ながら天井が、高い處に照々して間數十ばかりもござりますのを、牛車に積んで來て、背後に大な森をひかへて、黒塗の門も立木の奥深う、巨寺のやうにお建てなされて、東京の御修業さきから、御子息の喜太郎様が歸らつしやりましたのに世を譲つて、御夫婦一先づ御隠居が住みましけ。去年の夏でごぎりますがの、喜太郎様が東京で御贔屓にならしつた、然る御大家の嬢様ぢやが、夏休みに、ぶら／＼病の保養がしたい、と言はつしやる。海邊は賑かでも、馬車が通つて埃が立つ。閑静な處をお望み、間數は多し誂へ向き、隠居所を三間ばかり、腰元も二人ぐらゐ附く筈と、御子息から相談を打たつしやると、隠居と言へば世を避けたも同様、又本宅へ居直るも億劫なり、年寄と一所では少い御婦人の氣が詰らう。若いものは若い同士、本家の方へお連れ申して、土用正月、歌留多でも取つて遊ぶが可い、嫁も嘸喜ばう、と難有いは、親でなう。其處で、其のお嬢様に御本家の部屋を、幾つか分けて、貸すことになりましけ。或晩、腕車でお乗込み、天上ぬけに美い、と評判ばかりで、私等つひぞお姿も見ませな

んだが、下男下女どもにも口留めして、秘さしつたも道理ぢやよ。

其の嬢様は落つこちさうなお腹ぢやげな。」

「むゝ、孕んで居たかい。そりや怪しからん、其の息子と言ふのが馴染ではないのかね。」

「御推量でござります、其處ぢや、お前様。見えて半月とも経ちませぬに、豪い騒動が起つたのは、喜太郎様の嫁御が又臨月ぢや。

御本家に飼殺しの親爺仁右衛門、渾名も苦蟲、むづかしい顔をして、御隠居殿へ出向いて、まじり／＼、煙草を捻つて言ふことには、（ハイ、これ、昔から言ふことだ。二人一齊に産をしては、後か、前か、いづれ一人、相孕の怪我がござるで、分別なうては成りませぬ、）との。

喜十郎様、凶年にもない腕組をさつせえて、（善惡は兎も角、内の嫁が可愛いにつけ、餘所の娘の臨月を、出て行けとは無慈悲で言はれぬ。たゞし廂を貸したものに、母屋を明渡して嫁を隠居所へ引取る段は、先祖の位牌へ申譯がない。私等が本宅へ立歸つて、其の嬢様には此の隠居所を貸すとしやう）ーー御夫婦、黒門を出さしつたのが、又世に立たつしや

る前表かの。
鶴谷は再度、御隠居の代になりました。」
「息子さんは不埒が分つて勘當かい。」
「聞かつせえまし、喜太郎様は亡くなりましたよ。前後へ黒門から葬禮が五つ出ました。」
「五つ！」
「えゝ、えゝ、お前様。」
「誰と誰と、ね？」
「はじめが其の出養生の嬢様ぢや。これが産後でおいとしうならしつた。大騒ぎのすぐあと、七日目に嫁御がお産ぢや。
汐時が二つはづれて、朝六つから夜の四ツ時まで、苦しみ通しの難産でなう。
村中は火事場の騒ぎ、御本宅は寂として、御經の聲やら、咳やら・・・・・」

十四

「占者が卦を立てゝ、こりや死靈の祟がある。此の鬼に負けては成らぬぞ。此の方から逆寄せして、別宅の其の産屋へ、守刀を眞先に露拂ひで乗込めさ、と古袴の股立ちを取つて、突立上りますのに勢づいて、お産婦を褥のまゝ、四隅と兩方、六人の手で密と舁いて、釣臺へ。

お先立ちが其の易者殿、御幣を、ト襟へさしたものでござります。筮竹の長袋を前半ぢや、小刀のやうに挾んで、馬乗提灯の古びたのに算木を顯しましたので、黒雲の蔽かぶさつた、蒸暑い畔を照し、大手を掉つて參ります。

嫁入道具に附いて來た、藍貝柄の長刀を、柄拂ひして・仁右衞門親仁が擔ぎました。眞中へ、お産婦の釣臺を。其のわきへ、喜太郎様が、帽子かぶりで、蒼くなつて附添つた、背後へ持明院の坊様か緋の衣ぢや。あとから下男下女どもがぞろ／＼と従きました。取揚婆さんは前へ早や驅抜けて、黒門のお部屋へ産所の用意。

途中、何とも希有な通りものでござりまして、あの螢が又むら／＼と、蠅がなぶるやうに御病人の寝姿に集りまずと、おなじ煩うても、美しい人の心かして、夢中で、恁う小兒のやうに、手で取つちや見さしつけ。

上へ手を上げさつしやるのも、御容體を聞くにつけ、空をつかんで悶えさつしやるやうで、目も當てられぬ。

其でも崇りに負けるなと、言うて、一生懸命、仰向かしつた枕をこほれて、然まで瘠せも見えぬ白い頬へかゝる髪の先を、確乎白歯で噛ましつたが、お馴染ぢや、私が藪の下で待つけて、御新造様しつかりなさりまし、と釣臺に縋つたれば、アイと、細い聲で云うて莞爾と笑はしつた。橋を渡つて向うへ通る、暗の晩の、榛の木の下あたり、螢の数の宙へいかいことちら／＼して、常夏の花の俤立つのが、貴方の顔のあたりぢや、と目を瞑つて、おめでたを祈りましたに……」

聲も寂しう、

「お寺の鍾か聞えました。」

「南無阿彌陀佛、」

「お可哀相に、初産で、其の晩、なう。厭な事でこざりまず。黒門へ着かしつて、産所へ据ゑよう、としますとの、それ、出養生の嬢様の、お産の床と同一ぢや。（あゝ、青い顱巻をした方が、寝てゝござんず、些と傍へ）と……まあ、難産の嫁御が然う言はしつけ。

其奴に、負けるな、押潰せ、と構はず褥を据ゑましたが、夜露を受けたが悪かつたか最うお医者でも間に合はず。

（あなたも。……口惜い、）と恍惚して、枕に犇と喰つかしつて、うむと云ふが最期で、の身二ツになりはならしつたが、産聲も聞えず、両方ともそれなりけり。餘りの事に、取逆上せさしつたものと見えまして、喜太郎様は其の明方、裏の井戸へ身を投げて了はしつた。井戸替もしたなれど、不氣味ぢやで、誰も、はい、其の水を飲みたがりませぬ處から、井桁も早や、青芒にかくれましたよ。七日に一度、十日に一度、仁右衞門親仁や、私が許の宰八ーー少いものは初から恐ろしがつて寄つきませぬでーー年役に出かけては、雨戸を明けたり、引窓を繰つた

り、日も入れ、風も通したなれど、此の間の其の、なう、嘉吉が氣が違ひました一件の時から、いゝ年をしたものまで、黒門を向うの奥へ、木下闇を覗きますと、足が縮んで、一寸も前へ出はいたしませぬ。簪の蒼い光つた珠も、大方螢であらう、などゝ、ひそ／＼風説をします處へ、芙萸の葉に目口のある、小さいのがふら／＼歩行いて、其のお前様、

（秋谷邸の細道ぢや、

誰方か見えても・・・・・）

でござわませう。人足が絶えるとなれば、草が生えるばつかりぢや。ハテ黒門の別宅は是非に及ばぬ。秋谷邸の本家だけは、人足が絶やしたうないものを、何うした時節か知らぬけれど、鶴谷の寿命が來たのか、と喜十郎様は、かさね／＼おつむりが眞白で。おふくろ様も好いお方、おいとしい事でござります。

おゝ、もゝ、つい長話になりまして、そちこち刻限、あゝ、可厭な芙萸の葉か、唄うて歩行く時分になりました。」

と姥は四邊を〓した。浪の色蒼くなつた。

寂然として、果は目を瞑つて聞入つた旅僧は、夢ならぬ顔を上げて、霞簀から街道の前後を視めたか、日脚を仰ぐまでもない。

「身に染む話に聞惚れて、人通りが最う影法師ぢや。世の中には種々な事がある。お婆さん、お庇で澤山學問をした、難有う、どれ・・・・・」

十五

「そして、御坊様は、これから何處まで行かつしやりますよ。」

包を引寄せる旅僧に連れて、姥も腰を上げて尋ねると、

「鎌倉は通越して、藤澤まで今日の内に出ようと云ふ考へだつたが、最う、是ぢや葉山で灯が點かう。」

「おゝ、然う言や、森戸の松の中に、ちら／＼と灯が見える。」

「よう御存じでござりまずの。」

「未だ俗の中に知つて居ます。其處で鎌倉を見物にも及ばず、東海道の本筋へ出ようと云ふ考へぢや

つたが、早や遅い。修行が足りんで、樹下、石上、野宿も辛し、」

と打微笑み、

「鎌倉まで行きませうよ。」

「それは／＼、御不都合な、つい話に實が入わまして、まあ、飛だ御足を留めましてござります。」

「いや、何ういたして、恭い。私は尊いお説教を聽問したやうな心持ぢや。何、嘘ではありません。見なさる通り、行脚とは言ひながら、氣散じの旅の面白さ。蝶々蜻蛉の道連には墨染の法衣の袖の、發心の涙が乾いて、おのづから果敢ない浮世の露も忘れる。何時となく、佛の御名を唱へるのにも遠ざかつて、先刻も、お前ね。實は此處に來しなであつた。秋谷明神と云ふ、其の森の中の石段の下を通つて、日向の麥畠へ差懸ると、此邊には餘り見懸けぬ、十八九の色白な娘が一人、めりんす友染の襷懸け、手拭を冠つて畑に出て居る。歩行きながら振返つて、何か、此處等におもしろい事もないか、と徒口半分、

「檜笠の下頤から頤を出して尋ねるとね。

はい、浪打際に子産石と云ふのがござんす。これ／＼で此處の名所、と土地自慢も、優しく敬へて、

石段から眞直ぐに、畑中を切つて出て見なさんせ、と指さしを為てくれました。如何に石が名物でも、男ばかりで兒が出來るか。何と、姉や、と麥にかくれる島田を覗いて、天狗わらひに冴えて來ました、面目もない不了簡。嘉吉とかを聞くにつけても、よく氣が違はずに濟んだ事、とお話中に慄氣としたよ。黒門の別荘とやらの、話を聞くと引入れられて、氣が沈んで、しんみりと眞心から念佛の聲が出ました。

途中すがらも其の若い人たちを的に佛名を唱へませう。木賃の枕に目を瞑つたら、尚歴然〳〵、と其の人たちの、姿も見えるやうな氣がするから、一層よく念佛が申されようと考へる。

聞かしておくれの、お婆さん、お前は善智識、と云うても可い、私は夜通しでも構はんが。餘り身を入れて話をするーー聞くーーして居たので、邪魔になつては、と云ふ遠慮か、四五人此方を覗いては、素通をしたのがあります。

近在の人と見える。風呂敷包を腰につけて、草履穿きで裾をからげた、杖を突張つた、白髪の婆さんの、お前さんとは知己と見えるのが、向うから聲をかけたつけ。お前さんが話に夢中で、氣か着かなん

だものだから、其まゝほく／／去つて了つた。私も聞惚れて居た處、話の腰を折られては、と知らぬ顔で居たつけよ。

大層お店の邪魔をしました、實に濟まぬ。」

と扇を膝に、兩手で横に支きながら、丁寧に會釋する。

姥はあらためて右瞻左瞻たが、

「お上人様、御殊勝にござります、御殊勝にござります。難有や、」

と淺からず渴仰して、

「本家が村一番の大長者ちやと云へば、申憎い事ながら、何處を宿ともお定めない、御見懸け申した御坊様ぢや。推しても行つて回向をせう。あゝもせう、恁うもして遣らう、と齋布施をお目當で・・・・・」

とすつきり云つた。

「こりや仰有りさうな處、御自分の越度をお明かしなさりまして、路々念佛申して遣らう、と前途をお急ぎなさります飾りの無いお前様。

道中、お髪の伸びたのさへ、却つて貴う拝まれまする。何うぞ、其の御回向を黒門の別宅で、近々として進ぜて下さりませぬか。・・・・・もし、鶴谷

でも何(ど)のくらゐ喜(よろこ)びますか分(わか)りませぬ。」

十六

鶴谷が下男、苦蟲の仁右衛門親仁。角のある人魂めかして、ぶらりと風呂敷包を提げながら、小川べりの草の上。

「なあよ、宰八、」

「やあ、」

と續いた、手ぼう蟹は、夥間の穴の上を冷飯草履、兩足をしやちこばらせて、舞鶴の紋の白い、萌黄の、是も大包。夜具を入れたのを引背負つたは、民が塗炭に苦んだ、戰國時代の駈落めく。

「何か、お前が出會したーー黒門に逗留してござらしやる少え人か、手鞠を拾つたちゆうは何處らだつけえ。」「直きだ、そうれ、お前が行く先に、猫柳がこんもりあんべい。」

「おゝ、」

「其の根際だあ。帽子のふちも、ぐつたり、と草臥れた形での、其處に、」

と云つた人聲に、葉裏から螢が飛んだ。が、三ツ五ツ星に紛れて、山際薄く、流が白い。

此の川は音もなく、霞のやうに、どんよりと青田の村を這ふのである。

「此處だよ。丁ど、」

と宰八は一寸立留まる。前途に黒門の森を見てあれば、秋谷の夜は此處よりぞ暗くなる、と前途に近く、人の足許が朦朧と、早や其の影が押寄せて、土手の低い草の上へ、襲ひかゝる風情だから、一人が留まれば皆留まつた。

宰八の背後から、最う一人。杖を突いて續いた紳士は、村の學校の訓導である。

「見馴れねえ旅の書生さんぢや、下ろした荷物に、寐べりかゝつて、腕を曲げての、足をお前、草の上へ横投げに投出して、ソレ其處等、白鷺の鶏冠のやうに、川面へほんのり白く、すい／＼と出て咲いて居ら、畫間見ると桃色の優しい花だ、はて、蓬でなしよ。」

「石竹だつぺい。」

「撫子の一種です、常夏の花と言ふんだ。」と訓導は姿勢を正して、杖を一つ、くるりと廻はすと、ドプン。

「えゝ、！驚かなくても宜しい。今のは蛙だ。」

「其の蛙……いんねさ、常夏け。其の花を摘んで何うするだか、一束手ぶしに持つたかね。別にハイ其を視めるでもねえだ。美しい目水晶ぱちくりと、川上の空さ碧く光つとる星い向いて、相談打つやうな形だね。

草鞋がけぢやで、近邊の人ではねえ。道さ迷つたら教へて進ぜべい、と私最う内へ歸つて、婆様と、お客に賣つた澁茶の出殼で、茶漬え掻食ふばかりだもんだで、のつそり其の人の背中へ立つて見て居ると、しばらく經つてよ。

むつくりと起返つた、と思ふとの。・・・・・・・

（爺様、あれ、／＼、）」

爾時、宰八川面へ乘出して、母衣を倒に水に映した。

「（手毬が、手毬が流れる、流れてくる、拾つてくれ、禮をする。）

見ると、成程、泡も立てずに、夕焼が殘つたや、つな尾を曳いて、其の常夏を束にした、眞丸いのが浮いて來るだ。

（錢金は扨措かつせえ、だか、足を濡らすは、厭な事だ。）と云ふ間も無え。突然ざぶりと、少え人

は衣服の裾を掴んだなりで、川の中へ飛込んだつけ。

押問答に、小半時かゝればとつて、直ぐに突ん流れるやうな疾え水脚では、コレ、無えものを、其處は他國の衆で分らねえ。稲妻を掴へさうな慌て方で、ざぶ／＼眞中で追かける、人の煽りで、水が動いて、手毬は一つくるりと廻つた。岸の方へ寄るでねえかね。

（えら！氣の疾え先生だ。然まで欲しけりや算段のうして、柳の枝を折ぺつしよつても引寄せて取つて遣るだ、見さつせえ、旅の空で、召ものがびしよ濡れだ。）と叱言を言ひながら、岸へ來たのを拾はう、と私、えいやつと踞んだが。

こんな川でも、動揺みにや浪を打つわ、濡れずば栄螺も取れねえ道理よ。私が手を伸すとの、又水に持つて行かはて、手毬は矢張、川の中で、其の人が取らしつけがな。……此處だあ仁右衛門、先生様も聞かつせえ。」

と夜具風呂敷の黄母衣越に、茜色の其の顱巻を捻向けて、

「厭な事は、……手毬を拾ふと、其の下に、猫が

一匹居(いっぴきゐ)たではねえかね。」

十七

訓導は苦笑ひして、

「可い加減な事を云ふ、狂氣の嘉吉以來だ。お前は惡く變なものに知己のやうに話をするが、水潛りをするなんて、猫化けの怪談にも、つひに聞いた事はないぢやないか。」

「お前樣もね、當前だあ是れ、空を飛ばうが、泳がうが、活きた猫なら秋谷中私ら知己だ。何も厭な事はねえけんど、水ひたしの毛がよれ／＼、前足のつけ根なぞは、あか膚よ。げつそり骨の出た死骸でねえかね。」

訓導は打棄るやうに、

「何だい、死骸か。」

「何だ死骸か、言はつしやるが、死骸だけに厭なこんだ。金壺眼を塞がねえ。其の人が毬を取ると、

三毛の斑が、ぶよ、ぶよ、一度、ぷくりと腹を出いて、目がぎよろりと光ツたけ。其處ら鼠色の汚え泡だらけになつて、どんみりと流れたわ、水とハイ摺々〳〵でのーー其方は岸へ上つて、腰までづぶ濡れの衣を絞るとつて、帽子を脱いで仰向けにして、其中さ、入れさしつた、傍で見ると、紫もありや黄色い絲もかゞつてある、五色のーー手毬は、然まで濡れては居ねえだつけよ。」

「なあよ、宰八、」

「何だえ。」

仁右衞門は沈んだ聲で、

「其の手毬は何うしたよ。」

「今でも其の學生が持つてるかね。」

背後から、訓導も又聞き挾む。

「勿然として消え失せたゞ。夢に拾つた金子のやうだね。へ、へ、へ、」

とをかしな笑ひ方。

「ふん、」

と苦蟲は苦つたなりで、てく／／と歩行き出す。

「嘘を吐け、又はぢめた。大方、お前が目の前で、しやぼん球のやうに、ぱつと消えてゞもなくなつた

らう、不思議さな。」
「違えます、違えますとも！」
仁右衛門の後を打ちながら、
「其の人が、
（爺様、此の里では、今時分手毬をつくか。）
（何でね？）
（小兒たちが、優しい聲、懐しい節で唄うて居る。
（此處は何處の細道ぢや、
秋谷邸の細通ぢや・・・・・）

一件ものをの、優しい聲、懐しい聲ぢや云うて、手毬を突くか、と問はつしやるだ。
飛でもねえ、あれはお前様、芙萸の葉が、と言はうとしたが、待ちろ、藝もねえ、村方の内證を餞舌つて、恥掻くは知慧でねえと、
（何お前様、學校で體操するだ。おたま杓子で球をすくつて、ひるてんの飛つこをすればちゆツて、手毬なんか突きつこねえ、）と、先生様の前だけんど、私一ツ威張つたよ。」
「何だ、見ともない、ひるてんの飛びつことは。テニスだよ、テニスと言へば可い。」

「かね・・・・・私また西洋の雀踊か、と思つたけ、まあ、可え。」
「些とも可かあない、」
と訓導は唾をする。
「それにしても、奥床しい、誰が突いた毬だらう、と若え方問はつしやるだか。
のつけから見當はつかねえ、けんど、主が袂から瀧のやうに水が出るのを見るにつけても、何とかハイ勘考せねばなんねえで、其の手毬を持つて見た、」
と黄母衣を一つ揺上げて、
「濡れちや居ねえが、ヒヤリとしたでね、可い塩梅よ、引込んだのは手棒の方、」
へゝ、と又獨りで可笑がり、
「此方の手で、ハイ海へ落ちさつしやるお日様と、黒門の森に掛つたお月様の眞中へ、高く恁う透かして見つけ。
しやぼん球ではねえよ。眞圓な手毬の、影も、草に映つたでね。」
「それが又何うして消えた、馬鹿な！」
と勢込む、つき反らした杖の尖が、ストンと蟹の穴へ狭つたので、厭な顔をした訓導は、抜きざまに

一足飛ぶ。

「まあ、聞かつせえ。

玉味噌の鑑定とは、ちくと物が違ふでな、幾ら私が捻くつても、何處のものだか當りは着かねねえ。

（霞のやうな小川の波に、常夏の影がさして、遠くに・・・・・・（細道）が聞える處へ、手毬が浮いて・・・・・三年五年、旅から旅を歩行いたが、又こんな嬉しい里は見ない、）

と、づぶ濡の衣を垂れる雫さへ、身體から玉かこぼれでもするほどに若え方は喜ばつしやる。」

十八

「ーー（此の上誰か、此の手毬の持主に逢へるとなれば、爺さん、私は本望だ、野山に起臥して旅をするのも其の為だ。）

と、話さつしやるでの。村を賞められたが憎くねえだし、又それまでに思はつしやるものを、唯分りやしねえで放掛しては、何か私、氣が濟まねえ。

其處で、草原へ踞み込んで、信にはなさりますめえけんど、と嘉吉に蒼い珠授けさしつた……・」

しばらく默つて、

「の、事を話したらばの。先生様の前だけんど、嘘を吐け、と天窓からけなさつしやりさうな少え方が、

（おゝ、其の珠と見えたのも、大方星ほどの手毬だらう。）と、あの又碧い星を視めて云ふだ。けちりんも疑はねえ。

（なら、未だ話します事がござります、）と次手に黒門の空邸の話をするとの。

（川は其の邸の、庭か背戸を通つて流れはしない

か。）と乗出しけよ。・・・・・

（流れは見さつしやる通りだ）・・・・・・」

今もおなじやうな風情である。ー一薄りと廂を包む小家の、紫の煙の中も繞れば、低く裏山の根にかゝつた、一刷灰色の靄の間も通る。青田の高低、麓の凸凹に従うて、柔かにのんどりした、此の一巻の布は、朝霞には白地の手拭、夕焼には茜の襟、襷になり帯になり、果は薄の裳に成つて、今もある通り、村はづれの谷戸口を、明神の下あたりから次第に子産石の濱に消えて、何處へ灌ぐと云ふこともない。口につけると鹽氣があるから、海の潮がさすのであらう。其の川裾のたよりなく草に隠れるにつけて、明神の手水洗にかけた献燈の發句には、是を霞川、と書いてあるが、俗に呼んで湯川と云ふ。

霞に紛れ、靄に交つて、ほの／＼と白く、何時も水氣の立つ處から、言ひ習はしたものらしい。

あの、薄煙、あの、靄の、一際夕暮を染めた彼方此方は、遠方の松の梢も、近間なる柳の根も、いづれも此の水の淀んだ處で。畑一つ前途を仕切つて、縦に幅廣く水氣が立つて、小高い礎を朦朧と上に浮

かしたのは、森の下闇で、靄が餘所よりも判然と濃くかゝつた所為で、鶴谷が別宅の其の黒門の一構。

三人は、彼處をさして辿るのである。

爰に渠等が傳ふ岸は、一間ばかりの川幅であるが、鶴谷の本宅の邊では、凡そ三間に擴がつて、川裾は早や其邊りからびしよ／＼と草に隱れる。

此處へは、流をさかのぼつて來るので、間には橋一つ渡らねばならぬ。

橋は明神の前、三崎街道に一つ、村の中に一つ。今しがた渠等が渡つて、此處から見える其の村の橋も、鶴谷の手で欄干はついて居るが、細流の水靜かなれば、偏に風情を添へたやう。青い山から靄の麓へ架け渡したやうにも見え、低い堤防の、茅屋から茅屋の軒へ、階子を横へたやうにも見え、唯ある大家の、物好に、長く渡した廻廊かとも視められる。

灯もやゝ、ちら／＼と青田に透く。川下の其方は、藁屋續きに、海が映つて空も明い。一ー水上の奥になるほど、樹の枝に、茅葺の屋根が掛つて、蓑蟲が塒したやうな小家勝の、それも三つが二つ、やがて一つ、窓の明も射さず、水を離れた夕炊の煙ばかり、細く沖で救を呼ぶ白旗のやうに、風のまに／＼打靡

く。海の方は、暮が遅くて灯か疾く、山の裾は、暮か早くて、燈が遅いさうな。

まだ其も、鳴子引けば遠近に便があらう。家と家とが間を隔て、岸を措いても相望むのに、黒門の別邸は、かけ離れた森の中に、唯孤家の、四方へ大なる蜘蛛の如く脚を拡げて、何處までも其の暗い影を畝らせる。

月は、其の上にかゝつて居るのに。・・・・・

先達の仁右衛門は、早や其の樹立の、餘波の夜に肩を入れた。が、見た目のさしわたしに似ない、帯がたるんだ、ゆるやかな川添の道は、本宅から約八丁と云ふのである。

宰八は言續いで、

「・・・・（外廻りを流れて來るし、何もハイ空家から手毬を落す筈はねえ。そんでも猫の死骸なら、彼處へ持つて行つて打棄つた奴があるかも知んねえ、草ぼう／／だでなう、）と私、話をしたゞがね。」

十九

「其から其の少え方は、（何うだらう、其の黒門の空家と云のを、一室借りるわけには行くまいか、自炊を遣つて、暫時旅の草臥を休めたい、）と相談打つたが。

ねえ、先生様。

お前様、今の住居は、隣の嬶々が小兒い産んで、ぎやあ／／煩え、何處か貸す處があるめえか、言はるゝで、そん當時黒門さ何うだちゆつたら、あれは、と二の足を蹈ましつけな。」

と横ざまに浴せかけると、訓導は不意打ながら、さしつたりで、杖を小脇に引抱き、

「學校へ通ふのに足場が惡くつて、道が遠くつて仕様がないから留めたんだ。」

「朝寝さつしやる所為だつぺい。」

仁右衞門が重い口で。

訓導は教ふる如く、

「第一水が惡い。あの、又眞蒼な、草の汁のやうなものが飲めるものかい。」

「然うかねーはあ、まづ何にしろだ。此方から頼めばとつて、晝間掃除に行くのさへ、厭がります空屋敷ぢや。其處が望み、と仰有るに、お住居下されば其の部屋一ツだけも、屋根の草が無うなつて、立腐れが保つこんだで、此方は願つたり、叶つたり、本家の旦那も嘸喜びませうが、尋常體の家でねえ。あの黒門を潜らつしやるなら、覺悟して行かつせえ、可うがすか、と念を入れると、

（いや其の位の覺悟は何時でもして居る。）と落着いたもんだてえば。

はてな、此の度胸だら盗賊でも大将株だ、と私、油断はねえ、一分別したゞかね、仁右衛門よ、」

「おゝよ。」

「前刻、着たつ切で、手毬を拾ひに川ん中さ飛込んだ時だ。旅空かけて衣服を何うするだ、と私頼まれ效もなかつたけえ、氣の毒さもあり、急がずば何とかで濡れめえものを夕立だ、と我鳴つた時よ。

（着替は一枚ありますから・・・・）と見得でねえわ、見得でねえね。極りの惡さうに、人の心を無にしねえで言譯をするやうに言はしつけが、此奴を睨んで、はあ、其處へ私が押惚れたゞ。

殊勝な、優しい、最愛い人だ。是なら世話をしても仔細あんめえ。第一、あの色白な仁體ぢや・・・・・化・・・・・仁右衞門よ。」

「何い、」

「暗くなつたの、」

「彼是、酉刻ぢや。」

「は、南無阿彌阿佛、黒門前は眞暗だんべい。」

「大丈夫、月か射すよ。」

と訓導は空を見て、

「お前、其の手毬の行方は何うしたんだい。」

「其處だてね、まあ聞かつせえ。客人が、其の最愛らしい容子ぢや・・・・・化、」

と又言ひ掛けたが、青芒が川のへりに、雑木一叢、畑の前を背屈み通る眞中あたり、野末の靄を一呼吸に吸込んだかと、宰八唐突に、

「はツくしよ！」

胴震ひで、立縮み、

「風がねえで、えら太い蜘蛛の巣だ。仁右衞門、お前、はあ、先へ立つて、能く何ともねえ。」

「巣、巣處か、己あ樹の枝から這ひかゝつた、土蜘蛛を引掴んだ。」

「ひやあ、」
「七日風が吹かねえと、世界中の人を吸殺すものだちゆつけ、半日蒸すと、早や是だ。」
と握占めた掌を、自分で捻開けるやうにして開いたが、恐る／＼透して見ると、
「何ぢや、蟹か。」
水へ、ザブン。
背後で水車の如く杖を振廻して居た訓導が、
「長蛇を逸すか、」
と元氣づいて、高らかに、
「忽見る大蛇の路に當つて横はるを、劍を抜いて斬らんと欲すれば老松の影！」
「えゝ、靜にしてくらつせえ、・・・・・もう近えだ。」
と仁右衞門は眞面目に留める。
「おい、手毬は何うして消えたんだな、焦つたい。」
「其だがね、疾え話が、御仁體ぢや。化物が、の、それ、たとひ顔を嘗めればとつて、天窓から鹽とは言ふめえ、と考へたで、其處で、はい、黒門へ案内したゞ。仁右衞門も知つての通りーー今日は又ーー

内の婆々殿が肝入で、坊様を泊めたでの、……御本家から恁うやつて夜具を背負つて、私が出向くのは二度目だがな。」

二十

「其の書生さんの時も、本宅の旦那様、大喜びで、御酒は食らぬか。晩の物だけ重詰にして、夜さり又掻餅でも焼いてお茶受けに、お茶も土瓶も持つて行け。

言はつしやつたで、一風呂敷と夜具包を引背負つて出向いたがよ。

へい、お客様前刻は。・・・・・本宅でも宜しく申してゝござりました。お手廻りのものや、何や彼や、いづれ明日お届け申します。一餉ほんのお辨當がはり。お茶と、それから臥らつしやるものばかり。何うぞハイ緩り休まつしやりましと、口上言うたが、着物は既に浴衣に着換へて、燭臺の傍へ……こりやな、仁右衞門や私が時々見廻りに行く時、皆閉切つてあつて、晝でも暗えから要害に置いてあつた。……先に案内をした時に、彼是日が暮れたで、取り敢ず點して置いたもんだね。其のお前様、蝋燭火の傍に、首い傾げて、腕組みして坐つてござるで、氣に成るだ。

（何うかさつせえましたか。）と尋ねるとの。

此處だ！」

と唐突に屹と云ふ。

「えゝ何か、」と、訓導は一足退く。

宰八は委細構はず。

「手毬の消えたちゆうがよ。（爰に確に置いたのが見えなくなつた、）と若え方が言はつしやるけ。

そうら、始まつたぞ、と私一ツ腰をがつくりとやつたが、縁側へつかまつたあーーどんな風に、失くなつたか、はあ、聞いたらばの。

三ツばかり、どうん、どうん、と屋根へ打附つたものがあつた……大な石でも落ちたやうで、吃驚して天井を見上げると、彼處から、と言はしつけ。仁右衛門、それ、の、西の鉢前の十畳敷の隅ツこ。あの大掃除の検査の時さ、お巡査様か階子さして、天井裏へ瓦斯を點けて這込まつしやる拍子に、洋刀の鐺が上つて倒になつた刃が抜けたで、下に居た媼鈍屋の大面をちよん切つて、鼻柱怪我アした、一枚外れて居る處だ。

どんと倒落しに飛んで下りたは三毛猫だあ。川の死骸と同じ毛色ぢや、（これは、と思ふと縁へ出

て）・・・・・と客人の若え方が言はつしやつたで、私は思はず傍へ退いたが。

庭へ下りて、草茫々の中へ隱れたのを、急いで障子の外へ出て見て居る内に、床の間に据ゑて置いた、其の手毬がさ。はい、忽然と消えちゆうは、・・・・・此處の事だね。」

「消えたか、落したか分るもんか。」

「はあ、分らねえから、變でがしよ、」

「何も些とも變ぢやない。苟も學校のある土地に不思議と云ふ事は無いのだから。」

「でも、お前様、其の猫がね、」

「其も猫だか、鼬だか、それとも鼠だが、知れたもんぢやない。森の中だもの、兎だつて居るかも知れんさ。」

「其のお前様、知れねえについてゞがさ。」

「だから、今夜行つて、僕が正體を見届けて遣らうと云ふんだ。」

「はい、何うぞ、願えますだ。今までにも村方で、はあ、そんな事を言つて出向いたものがの、なあ、仁右衛門。」無言なり。

「前方へ行つて目をまはしつけ、」

「馬鹿、」
と憤然とした調子で呟く。きかぬ氣の宰八、紅の鋏を押立て、
「お前様も又、馬鹿だの、仁右衞門だの、坊様だの、人大勢の時に、よく今夜來さしつた。今まではハイつひぞ行つて見ようとも言はねえだつけが。」
「當前です、學校の用を缺いて、そんな他愛もない事にかゝり合つて居られるもんかい。休暇になつたから運動かた／＼來て見たんだ。」
「へ、お前様なんざ、畳が刎ねるばかりでも、投飛ばされる御連中だ。」
「何を、」
「私なんざ臆病でも、其の位の事にや馴れたでの、船へ乘つた氣で押こらへるだ。だうして／＼、まだ、前・・・・・」
「宰八よ、」
と陰氣な聲する。
「おゝ、」
「ぬしや又何も向う面になつて、をかしなものゝお味方をするにや當るめえでねえか。それでなうてせえ、おりや重いもので押伏せられさうな心持だ。」

と溜息をして云つた。浮世を鎖したやうな黒門の礎を、靄がさそうて、向うから押し擴がつた、下闇の草に踏みかゝり、茂の中へ吸ひ込まれるや、否や、仁右衞門が、

「わつ、」

と叫んだ。

二十一

「はじめの夜は、唯其の手毬が失せましたゞけで、別に變つた事件も無かつたでございますか。」

と、小次郎法師の旅僧は法衣の袖を搔合せる。

障子を開けて縁の端近に差向ひに坐つたのは、少い人、即黒門の客である。

障子も普通よりは幅が廣く、見上げるやうな天井に、血の足痕も扨着いては居らぬが、雨垂が傳つたら墨汁が降りさうな古びやう。巨寺の壁に見るやうな、雨漏の痕の畫像は、煤色の壁に風に吹きさらされた、袖のひだが、浮出た如く、浸附いて、どうやら饅頭の形した笠を被つて居るらしい。顔ぞと見る目鼻はないが、其の笠は鴨居の上になつて、空から畳を瞰下ろすやうな。惟ふに漏る雨の餘り侘しさに、笠欲しゝと念じた、壁の心が露れたものであらうーー抜群に此の魍魎が偉大いから、其が此の廣座敷の主〜／ルビ》一人のやうで、月影がばら／＼と鱗の如く樹の間を落ちた、廣縁の敷居際に相對した旅僧の姿などは、硝子障子に嵌込んだ、歌留多の繪かと疑

はるゝ。

「えゝ、」

と黒門の年若な逗留客は、火のない煙草盆の、遙に上の方で、燧火を摺つて、靜に吸ひつけた煙草の火が、其の色の白い頬に映つて、長い眉を黒く見せるほど室の内は薄暗い。ー一差置かれたのは行燈である。

「未だ其の以前でした。話すと大勢が氣にしますから、實は宰八と云ふ、爺さん・・・・・・」

「あゝ、手ぼうの・・・・・でございますな。」

「然うです。あの親仁にも謂はないで居たんですが、猫と一所に手毬の亡くなります些と、前です。此の古館の先此處へ坐りましたが、爺さんは本家へ、と云つて參りました。黄昏に唯私一人で、是から女中が來て、湯を案内する、上つて來ます、膳が出る。床を取る、寝る、と段取の極りました旅寵屋でも、旅は住心の落着かない、全く假の宿です……のに、……本家でも此處を貸しますのを、承知する事か、しない事か。便りに思ふ爺さんだつて、旅他國で畔道の一面識。自分が望んでゞはありますが、家と云へば、此の畳を敷いたーー八幡不知。

第一要害が全然解りません。眞中へ立つて彼方此方瞻したゞけで、今入つて來た出口さへ分らなくなりましたほどです。

大袈裟に言へば、其こそ、さあ、と云ふ時、遁路の無い位で。夏だけに、物の色は未だ分りましたが、日は暮れるし、貴僧、黒門までは可い天氣だつたものを、急に大粒な雨！と吃驚しますやうに、屋根へ掛りますのが、此の蔽かぶさつた欅の葉の落ちますのです。それと知りつゝ幾度も氣に成つては、縁側から顔を出して植込の空を透かしては見い／＼しました、」

と肩を落して、仰ぎ様に、廂はづれの空を覗いた。

「矢張晴れた空なんです……今夜のやうに。」

「しまするとと・・・・・」

旅僧は先祖が富士を見た状に、首あげて天井の高きを仰ぎ、

「此の、時々ぱら／＼と來ますのは、木の葉でございますかな。」

「御覽なさい、星が降りさうですから、」

「成程。其癖音の為ますたびに、ひや／＼と身うちへ應へますで、道理こそ、一雨かゝつたと思ひま

したが。」
「お冷えなさるやうなら、貴僧、閉めませう。」
「否、蚊を疵にして五百兩、夏の夜は是が千金にも代へられません、却つて陽氣の方かお宜しい。」
と顔を見て、
「しかし、如何にも其時はお寂しかつたでございませう。」
「實際、貴僧、遥々と國を隔てた事を思ひ染みました。此の果に故郷がある、と晝間三崎街道を通りつゝ、考へなかつたでもありませんが、場所と時刻だけに、又格別、古里が遠かつたんです。」
「失禮ながら、御生國は、」
「豊前の小倉で、・・・・・葉越と言ひます。」
葉越は姓で、渠が名は明である。
「噫、御遠方ぢや、」
と更めて顔を見る目も、法師は我ながら遙々と海を視める思がした。旅の窶が何となく、袖を壓して、其の單衣の縞柄にも顯れて居たのであつた。
「而して貴僧は、」
「是は申後れました、私は信州松本の在、至つて山家ものでございます。」

「それぢや、二人(ふたり)で、海山(うみやま)のお物語(ものがたり)が出來(でき)ますね。」

と、明(あきら)は優(やさ)しく、人懐(ひとな)つこい。

二十二

「不思議な御縁で、何とも心嬉しく存じますが、なか／＼お話相手には成りません。唯承りまするだけで、其が然し何より私には結構でございます。」

と僧は慇懃である。

明は少し俯向いた。瘠せた顋に襟狭く、

「其のお話と云ひますのが、實に取留めのない事で、貴僧の前では申すのもお恥かしい。」

「決して、然やうな事はございません。茶店の婆さんは此の邸に憑物のーーえゝ、唯聞きましたばかりでも、成程、浮ばれさうもない、少い佛たちの回向も頼む。就ては貴下のお話も出ましてな。何か御覺悟がおありなさるさうで、熟と辛抱をしてはござるが、怪しい事が重なるかして、お顔の色も、日毎に悪い。

と申せば、庭先の柿の廣葉が映る所為で、それで蒼白く見えるんだから、氣にするな、とおつしやるが、お身體も弱さうゆゑに、老寄夫婦で一層のこと氣にかゝる。

晝の内は宰八なり、誰か、時々〳〵お伺ひはいたしますが、此頃は氣怯れがして、其さへ不沙汰勝ぢやに因つて、私に能くお見舞申してくれ、と云ふ、暮々〳〵も其の託でございました。が何か、最初の内、貴方が御逗留と云ふのに元氣づいて、血氣な村の若い者が、三人五人、夜食の惣菜ものゝ持寄り、一升徳利なんぞ提げて、お話對手、夜伽はまだ穏な内、やがて、刃物切物、鐵砲持參、手覺えのあるのは、係羅に鼠の天麩羅を仕掛けて、ぐび／＼飲みながら、夜更けに植込みを狙ふなんと云ふ事がありまずさうで？ーー

婆さんが話しました。

「私は酒はいけず、對手は出來ませんから、皆さんの車座を、よく蚊帳の中から見ては寝ました。一時は随分賑でした。

まあ、入かはり立かはり、十日ばかり續いて、三人四人づゝ、參りましたが、此の頃は、ばつたり來なくなりましたんです。」

「と申す事でございますな。えゝ、時に其の入り交り立ち交りにつけて、何か怪しい、」

と言ひかけて偶と見返つた、次の室と隔ての襖は、

二枚だけ山のやうに、行灯の左右に峰を分けて、隣國までは灯が届かぬ。

心も置かれ、後髪も引かれた状に、僧は首に氣を入れて、ぐつと硬くなつて、向直つて、

「其の怪しいものゝ方でも、手をかへ、品をかへ、怯かす。ー一何か其の・・・・・疊がひとりでに持上りますさうでありまずが、眞個でございますかな。」

熟と視て聞くと、又俯向いて、

「ですから、お話しも極りが惡い、取留めのない事だと申すんです。」

「はゝあ、」

と胸を引いて、僧は寛いだ状に打笑ひ、

「或は然うであらうかにも思ひましたよ。では、唯村のものが可い加減な百物語。其の實、虚説なのでございますので？」

「否、それは事實です。疊は上りますとも。貴僧、今にも動くかも分りません。」

「えゝ！や、それは、」

と思はず、膝を、辷らした手で、はた／／壓へると、爪も立ちさうにない上床の固い事。

「是か、動くでございますか。」
「ですから、取留めのない事ではありませんか。」
と靜に云ふと、默つて、やゝあつて瞬して、
「然やう、餘り取留めなくも無いやうでございまず。すると、坐つて居るものは如何な儀に相成りませうか。」
「騷がないで、熟として居さへすれば、何事もありません。動くと申して、別に倒に立つて、裏返しになると云ふんぢやないのですから、」
「如何にも。まともにそれぢや、人間が縁の下へ投込まれる事になりますものな。」
「然うですとも。然うなつた日には、足の裏を膠で附着けて置かねばなりません。何ともないから、お騷ぎなさるなと云つても、村の人が肯かないで、疊の此の合せ目が、」
と手を支いて、づゞつと掌を、辷らしながら、
「はじめに、長い三角だの、小な四角に、縁を開けて、きし／＼と合つたり、ぐわら／＼と離れたり、然し、其の疾い事は、稲妻のやうに見えます。
然うすると最う、わつと言つて、飛ぶやら刎ねるやら、やあ！と踏張つて兩方の握拳で押へつける者

もあれば、いきなり三方火箸(さんぽうひばし)でも火吹竹(ひふきだけ)でも宙(ちう)で振(ふり)廻(まは)す人(ひと)もあるーーまあ一人(ひとり)や二人(ふたり)は、屹(きつ)と其(それ)だけで縁(えん)から飛出(とびだ)して遁(に)げて行(ゆ)きます。」

二十三

「どたん、ばたん、豪い騒ぎ。其の立騒ぐのに連れて、むく／＼むく／＼、と畳を、貴僧、四隅から持上げますが、二隅づゝどん、どん、順に十疊敷を一時に十ウ、下から握拳を突出すやうです。それ毛だらけだ、わあ女の腕だなんて言ひますが、何、其の畳の隅が裏返るやうに目まぐるしく翻るんです。

最う然うなると、氣の上つた各自が、自分の手足で、茶碗を蹴飛ばす、徳利を踏倒す、海嘯だ、と喚きませう。

其の立廻りで、何かの拍子にや怪我もします、踏切つたくらゐでも、ものがものですから、片足切られたほどに思つて、其かために寝ついたのもあるんださうで。漁師だとか言ひましたつけ。一人、わざ／＼山越えで濱の方から來たんだつて、怪物に負けない禁厭だ、と〓の針を顱鐵がはりに、手拭に疊込んで、うしろ顱卷なんぞして、非常な勢だつたんですが、猪口の缺の踏抜きで、痛が甚い、お崇だ、と人に負さつて歸りました。

其の立廻りですもの。灯が危いから傍へ退いて、私は其の毎に洋燈を壓へ壓へしたですがね。

坐つてる人が、眞個に轉覆るほど、根太から揺れるのでない證據には、私か氣を着けて居ます洋燈は、躍りはためく其の疊の上でも、靜として、些とも動きはせんのです。然し又洋燈ばかりが、笠から始めて、ぐる／＼と廻つた事がありました。やかて貴僧、風車のやうに舞ふ、其の癖、場所は變らないので、あれ／＼と云ふ内に火か眞丸になる、と見て居る内、白くなつて、其に蒼味がさして、茫として、熟と据る、其の厭な光つたら。

映る手なんざ、水へ突込んでるやうに、畝つた此の筋までが蒼白く透通つて、各自の顔は、皆其の熟した眞桑瓜に目鼻がついたやうに黄色く成つたのを、見合せて、呼吸を詰める、とふは／＼と浮いて出て、其の晩の座がしらと云ふ、一番強がつた男の膝へ、ふツと乘つたことがあるんですね。

わツと云ふから、騒いぢや怪我をしますよ、と私が暗い中で聲を掛けたのに、猫化だ遣つけろ、と誰だか一人、庭へ飛出して遁げながら喚いた者がある。畜生、と怒鳴つて、貴僧、危いの何のぢやない！

二と明くなつて舊の通洋燈が見えると、其の膝に乗られた男がーーこりや何です、可い加減な年配でしたーー嘗て水兵をした事があるとか云つて、豫て用意をしたものらしい、ドギ／＼ずる小刀を、火屋の中から縦に突刺してるぢやありませんか。」

「大變で、はあ、はあ、」

「ト思ふと一呼吸に、油壷をかけて突壊したもんだから、流れるやうな石油で、だうも、後二日ばかり弱りました。

爾時は幸に、當人、手に疵をつけたゞけ、勢で壊したから、火は其なり、ばつたり消えて、何の事もありませんでしたが、もしやの時と、皆が心掛けて置きました、蝋燭を點けて、跡始末に掛ると、さあ、可訝いのは、今の、怪我で取落した小刀が影も見えないではありませんか。

驚きました。是にや、皆が貴僧、茶釜の中へ紛れ込んで崇るとか俗に言ふ、あの蜥蜴の尻尾の切れたのが、行方知れずに成つたより餘程厭な紛失もの。襟へ入つて居はしないか、むず／＼するの、褌へさゝつちや居らんか、ひやりとずるの、袂か、裾か、と立つ、坐る、帯を解きます。

前にも一度、大掃除の検査に、階子をさして天井へ上つた、警官さんの洋劍が、何かの拍子に倒になつて、鍔元が緩んで居たか、すつと抜出したゝめに、下に居たものが一人、切られた事がある座敷ださうで。

外のものとは違ふ。切物は危い、よく探さつしやい、針を使つてさへ始める時と了ふ時には、丁と數を合はせるものだ。それでもよく紛失するが、疊の目にこぼれた針は、奈落へ落ちて地獄の山の草に生える。で、餓鬼が突刺される。其の供養のために、毎年六月の一日は、氷室の朔日と云つて、少い娘が娘同士、自分で小鍋立ての飯ごとをして、客にも呼ばれ、呼びもしたものだに、あのギラくした小刀が、縁の下か、天井か、承塵の途中か、在所が知れぬ、とあつては濟まぬ。是だけは夜一夜さがせ、と中に居た、酒のみの年寄が苦り切つたので、總立ちになりました。

これは、私だつて氣味が惡かつたんです。」

僧は唯目で應へ、目で頷く。

二十四

「洋燈の火でさへ、大概度膽を抜かれたのが、頼みに思つた豪傑は負傷するし、今の話で又變な氣になる時分が、夜も深々と更けたでせう。

どんな事で、何處から抛り投げまいものでもない。何か、對手の方も斟酌をするか、其とも誰も殺すほどの罪もないか、命に別條は先無からうが、怪我は今までにも随分ある。

さあ、捜す、と成ると、五人の天窓へ燭臺が一ツです。蝋の継ぎ足しはあるにして、一時に燃すと翌方までの便がないので、手分けをするわけには行きません。

最う然うなりますとね、一人ぢや先へ立つのも厭がりますから、其處で私が案内する、と背後からぞろ／＼。其の晩は、鶴谷の檀那寺の納所だ、と云ふ悟つた禪坊さんか一人變化出でよ、一喝で、と云ふ宵の内の意氣組で居たんです。些とお差合ひですね、」

「否、宗旨違ひでございます、」

と吃驚したやうに莞爾する。

「坊さんまじり其の人数で。此が向うの曲角から、突當りのはゞかりへ、廻縁になつて居ます。ぐるりと其の兩側、雨戸を開けて、沓脱のまはり、縁の下を覗いて、念のため引返して、又便所の中まで探したが、光るものは火屋の欠も落ちては居ません。ぢやあ次の室を・・・・・」

と振返つて、其の大なる襖を指した。

「と皆が云ふから、私は留めました。此處を借りて、一室だけでも廣過ぎるから、來てから未だ一度も次の室は覗いて見ない。恁う云ふ時開けては不可ません。廊下から、厠までは、宵から通つた人もある。轉倒して居る最中、どんな拍子で我知らず持つて立つて、落して來ないとも限らんから、念のため捜したものゝ、誰も開けない次の室へ行つてるやうでは、何かゞ秘したんだらうから、よし有つたにした處で、先方に若し其氣があれば、怪我もさせよう、傷もつけよう。さて無い、となると、矢張り氣が濟まんのは同一道理。押入も覗け、棚も見ろ、天井も捜せ、根太板をはがせ、と成つては、何十人でかゝつた處で、とても此の構へうち隅々まで隈なく見盡

される譯のものではない。人足の通つた、ありさうな處だけで切上げたが可いでせう――

其も然うか、愈々魔隱しに隱したものなら、山だか川だか、知れたものではない。まあ、人間業で叶はん事に、斷念めは着きましたが、危險な事には變りはないので。何時切尖が降つて來ようも知れません。些とでも楯になるものをと、皆が同一心です。言合はせたやうに順々に・・・・・前へ御免を被りますつもりで、私か釣つて置いた蚊帳へ、總勢六人で、小さくなつて屈みました。變におしおきでも待つてるやうで尚ほ不氣味でした。然うか、と云つて、夜々中、外へ遁出すことは思ひも寄らず、で、がた／＼震へる、突伏す、一人で寝てしまつたのがあります、是か一番可いのです。坊様は口の裏で、頻にぶつ／＼と念じて居ます。其舌の縺れたやうな、便のない聲を、蚊の唸る中に聞きながら、私がうと／＼しかけました時でした。密と一人が揺ぶり起して、

（聞えますか、）

と言ひます。

（ココだ、ココだ、と云ふ聲が、）

と、耳へ口をつけて囁くんです。其から、其へ段々、

又耳移しに。

（失物はコヽにある、と云、ふお知らせだらう、）

（如何か、）

と言ふ、ひそ／／相談。

耳を澄ますと、蚊帳越の障子のやうでもあり、廊下の雨戸のやうでもあり、次の間と隔ての襖際……又柱の根かとも思はれて、カタカタ、カタカタと響くーーあの茶立蟲とも聞えれば、壁の中で蝙蝠が鳴くやうでもあるし、縁の下で蟇が、コトコトと云ふとも考へられる。其が貴僧、氣の持ちやうで、ココ、ココ、ココヨとも、ココト、とも云ふやうなんです。

自分のだけに、手を繃帶した水兵の方が、一番に蚊帳を出ました。

返す氣で、在所をおつしやるからは仔細はない、と坊さんが又這出して、疊に擦附けるやうに、耳を澄ます。と水兵の方は、眞中で耳を傾けて、腕組をして立つてなすつたつけ。見當がついたと見えて、目で知らせ合つて、上下で頷いて、其の、貴僧の背後になつてます、」

「え！」

と肩越に淵を差覗くが如く、座をずらして見返りなから、

「成程。」

「北へ四枚目の隅の障子を開けますとね。溝へ柄を、其の柱へ、切尖を立掛けてあつたらうではありませんか。」

二十五

「其ツ切、危うございますから、刃物は一切厳禁にしたんです。

遊びに來て下さるも可し、夜伽とおつしやるも難有し、次手に狐狸の類なら、退治しようも至極御尤だけれども、刀、小刀、出刃庖丁、刃物と言はず、槍、鐵砲、ーー凡そ然う云ふものは断りました。

私も長い旅行です。随分どんな處でも歩行き廻ります考へで。いざ、と言や、投出して手を支くまでも、短刀を一口持つて居ますーー母の記念で、峠を越えます日の暮なんぞ、随分其がために氣丈夫なんですが、謹のために桐油に包んで、風呂敷の結び目へ、緊乎封をつけて置くのですが、」

「矢張、おのづから、其の、抜出すでございますか。」

「否、是には別條ありません。盗人でも封印のついたものは切らんと言ひます。尤も、怪物退治に持つて見えます刃物だつて、自分で抜かなければ別條はないやうに思はれますね。其に貴僧、騒動の起居

に、一番氣がゝりなのは洋燈ですから、宰八爺さんに然う云つて、恁うやつて行燈に取替へました。」

「で、行燈は何事も、」

「是だつて上ります。」

「あの上りますか。宙へ？」

時に、明の、行燈の其の皿あたりへ、仕切つて、うつむけに伏せた手か白かつた。

「すう、と恁う、畳を離れて、」

「はゝあ、」

とばかり、僧は明の手のかげで、燈が暗くなりはしないか、と危んだ目色である。

「其も手をかけて、壓へたり、据ゑようとしますと、其のはずみに、油をこぼしたり、臺ごとひつくりかへしたりします。障らないで、熟と柔順くしてさへ居れば、元の通りに据直つて、夜が明けます。一度なんざ行燈が天井へ附着ました。」

「天・・・・・井へ、」

「下に蚊帳か釣つてありますから、私も存じながら、寝て居たのを慌てゝ起上つて、蚊帳越にふら／＼釣り下つた、行燈の臺を押へようと、うつかり手をかけると、誰か取つて引上げるやうに鴨居を越し

て天井裏へするりと入ると、裏へ丁と乗つかりました。最う堆い、鼠の塚か、と思ふ煤のかたまりも見えれば、遥に屋根裏へ組上げた、柱の形も見える。

可訝いな、屋根裏が見えるくらゐぢや、天井の板が何處か外れた筈だが、と不圖氣がつくと、桟が弛んでさへ居りますまい。

根を抜けたものか知らん、餘り變だ、と貴僧。

茲で心が定まりますと、何の事もない。行燈は蚊帳の外の、宵から置いた處に丁とあつて、薄ぼんやり紙が白けたのは、最う雨戸の外が明方であつたんです。」

「其の晩は、お一人で、」

「一人です、然も一昨晩。」

「一昨晩？」と、思はず又ぎよつとする。

「で、何でございますか、其の夜伽連は、最う其以來懲りて來なくなつたんでございますかな。」

「お待ち下さい、トあの、西瓜で騒いだ夜は、たしか其の後でしたつけ。

何、こりや詰らない事ですけれども、弱つたには弱りましたよ。・・・・・

確か三人づれで、若い衆が見えました。矢張酒を

御持參で。大分お支度があつたと見えて、するめの足を噛りながら、冷酒を茶碗で煽るやうなんぢやありません。竹の皮包みから、此の陽氣ぢや魚の宵越しは出來ん、と云つて、焼蒲鉾なんか出して。旨うございましたよ、私もお相伴しましたつけ、」

と悠々と迫らぬ調子で、

「宵には何事もありませんでした。可い鹽梅な醉心地で、四方山の話をしながら、蠡一ツ飛んぢや來ない。然う言や一體蚊も居らんが、大方其の怪物が餌食にするだらう。其にしちや吝な食物だーー何々、海の中でも親方となると却つて小さい物を餌にする。鯨を見ろ、しこ鰯だ、なぞと大口を利いて元氣でしたか、やがて酒はお積りになる、夜が更けたんです。茲でお茶と云ふ處だけれど、茶ぢや理に落ちて魔物が憑け込む。醉醒にいゝもの、と縁側から轉がし出したのは西瓜です。聞くと、途中で畑盗人をして來たんださうでーーそれぢや却つて、憑込まうではありませんか。」

二十六

「手並を見ろ、狐でも狸でも、此の通りだ、と刃物の禁断は承知ですから、小刀も持つちや居りません、拳固で、貴僧。

小相撲ぐらゐ恰幅のある、節くれだつた若い衆でしたが・・・・・」

場所が又悪かつた。ーー

「前夜、ココココ、と云つて小刀を出してくれたと同一處、敷居から掛けて柱へ其の西瓜を極めて置いて、大上段です。

ポカリ遣つた。途端に何とも、凄まじい、石油罐が二三十打つかつたやうな音が臺所の方で聞えたんです。

唐突ですから、宵に手ぐすねを引いた連中も、はあ、と引呼吸に魂を引攫れた拍子にーー飛びました。其の貴僧、西瓜が、ストンと若い衆の胸へ刎上つたでせう。

仰向に引くりかへると、又騒動。

それ、肩を越した、えゝ、足へ乗つかる。わあゝ！

裾へ纏はる、火の玉ぢや。座頭の天窓よ、入道首よ、いや女の生首だつて、可い加減な事ばかり。夕顔の花なら知らず、西瓜が何、女の顔に見えるもんです。追掛けるのか、逃廻るのか、どたばた跳飛ぶ内、ドンドンドンドンと天井を下から上へ打抜くと、ぐわら／＼と棟木が外れる、戸障子が鳴響く、地震だ、と突伏したが、其なり寂として、靜になつて、風の音もしなくなりました。

ト屋根に生えた草の、葉と葉が入交つて見え透くばかりに、月が一ツ出て居ます。ー一今の西瓜が光るのでした。

森は押被さつて居りますし、行燈は固より其の立廻りで打倒れた。何か私どもは深い狭い谷底に居窘まつて、千切の崖の上に月が落ちたのを視めるやうです。然う言へば、欅の枝に這ひかゝつて、恁う、月の上へ蛇のやうに垂かゝつたのか、蔦の葉か、と思ふと、屋根一面に瓜畑になつて、鳴子縄が引いてあるやうな氣もします。

したゝかな、天狗め、とのぼせ上つて、宵に蚊いぶしに遣つた、杉ツ葉の燃殘りを取つて、一人、其の月へ投げつけたものかありました。

もろいの、何の、ぼろ／＼と朽木のやうに其の満月が崩れると、葉末の露と一つに成つて、棟の勾配を、辷り落ちて、消えたは可いか、ぼたり／＼雫が為出した。頸と言はず、肩と言はず、降りかゝつて來ましたが、手を當てる、とべとりとして粘る。嗅いで試ると、いや、貴僧、惡甘い匂と言つたら。

夜深しに汗ばんで、蒸々して、咽喉の乾いた處へ、其の匂ひ。血腥いより堪りかねて、縁側を開けて、私が一番に庭へ出ると、皆も跣足で飛下りた。

驚いたのは、最う夜か明けて居たことです。山の巓の方は蒼くなつて、麓へ靄が白んで居ました。

不思議な處へ、思ひかけない景色を見て、和蘭陀へ流された、と云ふのがあるし、堪らない、先行燈をつけ直せ、と怒鳴つたのが居る。

屋根の其邊だ、と思ふ、西瓜のあとには、烏が居て、コト／＼と嘴を鳴らし、短夜の明けた廣縁には、ぞろ／＼夥しい、褐色と黒いのと、松蟲鈴蟲のやうなのが、うよ／＼して、ざつと障子へ驅上つて消えましたが、西瓜の核が化つたんですつて。

連中は、ふら／＼と二日醉のやうな具合で、茫乎黒門を出て、川べりを歸りました。

橋の處で、杭にかゝつて、ぶか／＼浮いた眞蒼な西瓜を見て、それから夢中で、遁げたさうです。

晝過ぎに、宰八が來て、其の話。

私は其時分までぐつすり寝ました。

此の時をかしかつたのは、爺さんが、目覺しに茶を一つ入れて遣るべいつて、小まめに世話をして、佳い色に煮花が出來ましたが、生僧西瓜も盗んで來ない。何かないか、と考へて、有るーー臺所に糠味噌が、こりや私に、と云つて一々／＼運ぶも面倒だから、と手の着いたのぢやあるが、桶ごと持つて來て、時々／＼爺さんが何かを突込んで置いてくれるんでした。一人だから食べ切れないで、直きつき過ぎる、と云つて、世話もなし、茄子を蔕ごと生のもので漬けてありました。可い漬り加減だらう、と其に氣が着いて、臺所へ出ましたつけ。

（も客様あ、）

（何だい。）

（昨夜凄じい音がしたと言はしつけね、何にも落こちたものはねえね。）

つて言ひなから、やがて小鉢へ、丸ごと五つばかり出して來ました。

薄(うす)お納戸(なんど)の好(い)い色(いろ)で。」

二十七

「青葉の影の射す處、白瀬戸の小鉢も結構な青磁の菓子器に装つたやうで、志の美しさ。

箸を取ると、其の重つた茄子が、あの、薄皮の腹のあたりで、グツ、グツ。一ツ音を出すと、又一つグツ、最う一つのもググ、ググと聲を立てるんですものね。

變な顔をして、宰八が、

（お客様、聞えるかね。）

（あゝ鳴くとも。）

（ちんじちやうやうだ、此奴、）と爺様が鉈豆のやうな指の尖で、一寸押すと、其の壓されたのがググ、手をかへると又他のがググ。

心あつて鳴くやうで、何だか上になつた、あの蕃の取手まで、小さな角らしく押立つたんです。

又飛出さない内に、と思つて、私は一ツ噛つたですよ。」

「召食つたか。」

と、僧は怪訝顔で、

「それは、お豪い。」
「何聞く方の耳が鳴るんでせうから、何事もありません、茄子の鳴くわけは無いのですから。
其でも爺さんは苦切つて、少い時にや、随分惡物食したものだで、葬ひ料で酒エ買つて、犬の死骸なら今でも食ふが、茄子の鳴くのは厭だ、と言ひます。
尤も變なことは變ですが、同じ氣味の惡い中でも、對手が茄子だけに、こりやをかしくつて可かつたですよ。」
「茄子ならば、でございますが、ものは茄子でも、對手は別にございませう。」
明は俯向いて莞爾した、別に意味のない笑だつた。
「で、そりや晝間の事でございますな。」
「昨日の午後でした。」
「晝間からは容易でない。」
と半ば呟くが如くに云つて、
「では、昨夜あたりは嘸・・・・・・」と聞く方が眉を顰める。
「えゝ、酷うございました、何うせ、夜が寝られはしないんですから、」
「それでお窶れるれなさるのぢや、貴下、お顔の

色が飛だ惡い！・・・・・

茶店の婆さんが申したも、其の事でございます。唯今お話を伺ひました。そんなこんなで村の者も行かなくなり、爺様も夜は恐がつて參りませんから、貴下の御容子が分らないに因つて、家つきの佛を回向かた／＼、お見舞申してはくれまいか、と云ふに就いて、推參したのでございますが、いや、何とも驚きました。

いづれ御厄介に相成らねばなりませんが、私もだうか唯今の其の茄子の鳴くゞらゐな處で、御容赦が願ひたい。

何處と云つて三界宿なし、一泊御報謝に預る氣で參つたわけで。なか／＼家つきの幽靈、崇、物怪を濟度しやうなどゝ云ふ道徳思ひも寄らず。實は入道名さへ持ちません。手前勝手、申譯のないお詫びに剃つたやうな坊主。念佛さへ碌に眞心からは唱へられんでございまして、御祈祷僧などゝ思はれましては、第一、貴下の前へもお恥かしうございますが、如何でございませう。お宿を願ひましても差支へはないでございませうか。いくらか覺悟はして參りましたが、目のあたりお話を伺ひましては、些と二の

足でございますが。」

「一人でも客がありまずと、其だけ鶴谷では喜びますさうです。持主の本宅が喜びますものを、誰に御遠慮が入りますものですか。私もお連があつて、どんなに嬉しいか知れません。」

「そりや、鶴谷殿はじめ、貴下の思召しは然やうに難有うございましても、別に其の……えゝ、先、持主が鶴谷としますと、此の空屋敷の御支配でございますな、ーー其の何とも異様な、あの、其の、」

「それは私も御同然です。人の住むのが氣に入らないので荒れるのだらうと思ひますが。

其處なんです、貴僧。逆ひさへしませんければ、畳も行燈も何事もないのですもの。戸障子に不意に火が附いて其處いらめら／＼燃えあがる事がありましても、慌てゝ消す處は破れ、水を掛けた處は濡れますが、其なりの處は、後で見まずと濡れた様子もないのですから。

座敷だつて幾干もあります、貴僧、」

と不圖心づいたやうに、

「御一所でお煩ければ、隣のお座敷へ入らつしやい。何か正體を見届けようなぞと云つては不可ませ

んが、鶴谷か許したお客僧が、何も御遠慮には及びません。

但すらりと開かないで、何かゞ壓へてゞも居るやうでしたら、お見合せなさいまし。逆ふと惡いんでずから。」

二十八

「なか／＼、逆らひます處ではございませんし、座敷好みなんぞして可いものでございますか。

あの襖を振向いて熟と視ろ、とおつしやつたつて、容易にや其方も向けません次第で、御覧の通り、早や固くなつて居ります。

お話につけて申しますが、實は手前も此の黒門を潜りました時は、草に支へて、しばらく足が出ませんでございました。

其と申すが、先庭口と思ふ處で、キリキリトーンと、餘程其の大轆轤の、刎釣瓶を汲上げますやうな音がいたす。

尤も曰くづきの邸ながら、貴下お一方は先兎も角もいらつしやる。人が住めば水も要らうで、何も釣瓶の音が不思議と云ふでは、道理上、是や無いのでありまするが、婆さんに聞きました心積り、學生の方が自炊をしてお在と云へば、土瓶か徳利に汲んで事は足りる、と何となく思つてゞも居りました所為か、其の何うも水を汲む音が、馴れた女中衆であり

さうに思はれました。唯臺所の方を、何うやら嫋娜とした、脊の高い御婦人が、黄昏に忙しい裾捌きで通られたやうな、ものゝ氣勢もございます。

何となく賑かな様子が七輪に、晩のお菜でもふつ〳〵煮えて居ようと云ふ、豆腐屋さーーん、と町方ならば呼ぶ聲のしさうな様子で。

扨は婆さんに試されたか、と一旦は存じましたが、恁う笠を傾けて遠くから覗込みました、勝手口の戸からかけて、棟へ、高く烏瓜の一杯にからんだ工合が、何様、何ケ月も閉切らしい。

ござつたかな、と思ひながら、擽つたいやうな御門内の草を、密と蹈んで入りますと、春さきは嘸綺麗でございませう。一面に紫雲英が生えた、其の葉の中へ傳はつて、斷々〳〵ながら、一條、蒼ずんだ明い色のものが、這つたやうに浮いたやうに落ちて居ます。上へさした森の枝を、月が漏る影に相違は無さゝうなが、何となく婦人の黒髪、其の、丈長く、足許に光るやうで。

變に跨ぎ心地が惡うございますから、避けて通らうといたしますと、右の薄光りの影の先を、ころ／〳〵と何か轉げる、忽ち顔が露れたやうでございまし

たつけ、熟く見ると、兎なんで。

處で其の蛇のやうな光る影も、向かはつて、又私の足の出途へ映りましたが、兎はくる／＼と寝縛びなから、草の上を見附けの式嘉の方へ參る。

これが反對だと、舊の潛門へ押出されます處でございました。強ひて入りますほどの度胸はないので。

式臺前で、私は先挨拶をいたしたでございます。

主もおはさば聞し召せ、恁くの通りの青道心。何を頼みに得脱成佛の回向いたさう。何を力に、退散の呪誼を申さう。御姿を見せたまはゞ偏に禮拝を仕る。世にかくれます神ならば、念佛の外他言はいたさぬ。平に一夜、御住居の筵一枚を貸し給はれ・・・・・」

ーー旅僧は爾時、南無佛と唱へながら、漣の如き杉の木目の式臺に立向ひ、恁く誓つて合掌して、やがて笠を脱いで一揖したのであつた。ーー

「それから、婆さんに聞きました通り、壊れ／＼の竹垣について手探りに木戸を押しますと、直ぐに開きましたから、頬に先刻の、あの、えへん！えへん！咳をしながらーー酷くなつて居りますなーー芝

生を傳はつて、夥しい白粉の花の中を、是へ。お縁側からお邪魔をいたしました。

あの白粉の花は見事です。ちら／＼紅色のが交つて、咲いて居ますが、それにさへ、貴方、法衣の袖の障るのは、と身體をずぼめて來ましたが、今も移香がして、憚多い。

もと花畑であつたのが荒れましたらうか。中に一本、見上げるやうな丈のびた山百合の白いのか、うつむいて咲いて居ました。いや、それにも又慄然としたほどでございますから。

何事がございませうとも、自力を頼んで、何うの恁うの、と申すやうなことは夢にも考へては居りません。

しかし貴下は、唯今うけたまはりましたやうな可怖い只中に、能く御辛抱なさいます、實に大瞻でおいでなさる。」

「私くらゐ臆病なものはありません。・・・・・臆病で仕方がないから、成るがまかせに、抵抗しないで、自由になつて居るのです。」

「さあ、其處でございます。其を伺ひたいのが何より目的で參りましたが、何か、其の御研究でもな

さりたい思召(おぼしめし)で。」

「だういたしまして、私(わたし)の方(はう)が研究(けんきふ)をされて居(ゐ)ても、此方(こちら)で研究(けんきふ)なんぞ思(おも)ひも寄(よ)らんのです。」

「それでは、外(ほか)に、」

「えゝ、望(のぞ)みーーと申(まを)しますと、未(ま)だ我(が)があります。實(じつ)は願事(ねがひごと)があつて、こゝに恁(か)うして、參籠(さんろう)、通(つ)夜(や)をして居(を)りますやうなものです。」

二十九

「其が貴僧、前刻お話をしかけました、あの手毬の事なんです。」

「あゝ、其の手毬が最う一度御覧なさりたいので。」

「否、手毬の歌が聞きたいのです。」

と、うつとりと云つた目の涼しさ。月の夢を見るやうなれば、變つた望み、と疑ひの、胸に起る雲消えて、僧は一膝進めたのである。

「大空の雲を當てに何處となく、海があれば渡り、山があれば越し、里には宿つて、國々を歩行きますのも、詮ずる處、或意味の手毬唄を・・・・・・」

「手毬唄を。・・・・・如何な次第でございます。」

「夢とも、現とも、幻とも……目に見えるやうで、口には謂へぬーー而して、優しい、懐しい、あはれな、情のある、愛の籠つた、ふつくりした、然も、清く、涼しく、悚然とする、胸を掻毟るやうな、あの、恍惚となるやうな、まあ例へて言へば、芳しい

清らかな乳を含みながら、生れない前に腹の中で、美しい母の胸を見るやうな心持のーー唄なんですが、其の文句を忘れたので、命にかけて、憧憬れて、それを聞きたいと思ひますんです。」

此の數分時の言の中に、小次郎法師は、生れて以來、聞いたゞけの、風と水と、鐘の音、樂、あらゆる人の聲、蟲の音、木の葉の囁きまで、稲妻の如く胸の裡に繰返し、猶且つ覺えたゞけの經文を、颯と金字紺泥に瞳に描いて試みたが、其かと思ふのは更に分らぬ。

「して、其の唄は、貴下お聞きに成つたことがございませうか。」

「小兒の時に、なくなつた母親が唄ひましたことを、物心覺えた最後の記憶に留めたゞけで、何う云ふのか、其の文句を忘れたんです。

年を取るに従うて、まるで貴僧、物語で見る切ない戀のやうに、其の聲、其の唄が聞きたくツてなりません。

東京の或學校を卒業ますのを待かねて、故郷へ歸つて、心當りの人に尋ねましたが、誰のを聞いても、どんなに尋ねても、其と思ふのが分らんのです。

第一、母親の姉ですが、私の學資の世話をしてくれます、叔母が其を知りません。

唯夢のやうに心着いたのは、同一町に三人あつた、同一年ごろの娘です。

（産んだ其子が男の兒なら、
京へ上ぼせて狂言させて、
寺へ上ぼせて手習させて、
寺の和尚が、
道樂和尚で、高い縁から突落されて、
笄落し、
小枕落し、）

と、よく私を遊ばせながら、母も少かつた、其の娘たちと、毬も突き、追羽子もした事を現のやうに思出しましたから、其を捜せば、屹と誰か知つて居るだらう、と氣の付いた夜半には、むつくり起きて、嬉しさに雀躍をしたんですが、貴僧、其の中の一人は、未だ母の存命の内に、雛祭の夜なくなりました。それは私も知つて居るーー

一人は行方か知れない、と言ひます・・・・・

漸と一人、これは、縣の學校の校長さんの處へ縁づいて居ると云ふ。先可し、と早速訪ねて參りましたが、町はづれの侍町、小流があつて塀續きの、邸毎に、むかし植ゑた紅梅か澤山あります。未だ其の古樹がちらほら殘つて、眞盛りの、朧月夜の事でした。

今貴僧が此へ入らつしやる玄関前で、紫雲英の草を潜る兎を見たとおつしやいました、」

「いや、肝心のお話の中へ、お交ぜ下すつては困ります。然うは見えましたものゝ、まさか恁やうな處へ。或は其の・・・・・猫であつたかも知れません。」

「背後か直ぐ山ですから、一寸々々見えますさうです、兎でせう。

が、似た事のありますものですー其時は小狗でした。鈴がついて居りましたつけ。白垢の眞白なのが、ころ／＼と仰向けに手をじやれながら足許を轉がつて行きます。夢のやうに其のあとへついて、やがて門札を見ると指した家で。

まさか奥様に、とも言へませんから、主人に逢つて、ーー意中を話しますとーー

（夜中何事です。人を馬鹿にした。奥は病氣だからお目には懸れません。）

と云つて厭な顔をしました。夫人が評判の美人だけに、校長さんは大した嫉妬深いと云ふ事で。」

三十

「叔母がつく／／意見をしました。（はじめから彼家へ行くと聞いたら遣るのぢやなかつたーー默つておいでだから何にも知らずに惡い事をしたよ。さきぢや幼馴染だと思ひます、手毬唄を聞くなぞ、と尚よくない、そんな事が世間へ通るかい、）と恁うです。

母親の友達を尋ねるに、色氣の嫌疑はをかしい、と聞いて見ると、何、女の兒はませて居ます、其に紅い手絡で、美しく髪なぞ結つて、容づくつて居るから可い姉さんだ、と幼心に思つたのが、二つ違ひ、一つ上、亡くなつたのが二つ上で、其の奥さんは二ツ上のださうで、行方の知れないのは、分らないさうでした。

事か面倒になりましてね、其の夫人の親里から、叔母の家へ使が來て、娘御は何も唄なんか御存じないさうで、えゝ、世間體がございますから以來は、と苦り切つて歸りました。勿論病気でも何でもなかつたさうです。一月ばかり經つて、細かに、いろく

手毬唄、子守唄、童唄なんぞ、百幾つと云ふもの、綺麗に美しく、細々とかいた、文が來ました。しまひへ、紅で、ーー嫁入りの果敢なさを唄ひしが唄の中にも澤山におはしまし侯ーーと、だけ記してありました。・・・・・

唯今も大切にして持つては居ますが、勿論、其の中に、私の望みの、母の聲のはありません。

さあ、最う一人・・・・・行方の知れない方ですが・・・・・

又是が貴僧、家を越したとか、遠國へ行つたとか云ふのなら、幾干か手懸りもあるし、何の不思議もないのですが、俗に申します、神がくしに逢つたんで、叔母はじめ固く然う信じて居ります。

名は菖蒲と言ひました。一體其の娘の家は、母娘二人、どつちの乳母か、媼さんが一人、と母子だけのしもた屋で、しかし立派な住居でした。其の母親と云ふのは、私は小兒心に、唯歯を染めて居たのと、鼻筋の通つた、恁う面長な、而して帯の結目を長く、下襲か、蹴出しか、褄をぞろりと着崩して、日の暮方には、時々薄暗い門に立つて、町から見えます、山の方を視めては悄然佇んで居たのだけ幽に覺えて

居るんですが、人の妾だとも云ふし、本妻だとも云ふ、何處かの藩侯の落胤だとも云つて、些とも素性が分りません。

娘は、別に異つたこともありませんが、容色は三人の中で一番佳かつたーー然う思ふと、今でも目前に見えますが。

其の娘です、餘所へは遊びに來ましたけれど、誰も友達を、自分の内へ連れて行つた事はありませんでした。

寄合つて、遊事を。是からおもしろく成らうと云ふ時、不意に母さんがお呼げだ、と其媼さんが出て來て引張つて歸ることが度々で、急に居なくなる、跡の寂しさと云つたらありません。ーー先の内は、自分でも厭々引立てられるやうにして歸り／＼したものですが、一ツは人の許へ自分は來て、我が家へ誰も呼ばない、と云ふ遠慮か、妙な時に不圖立つちや、獨で歸つて了ふことがいくらもあつたんです。

ですから何だか其の娘ばかりは、思ふやうに遊べない、勝手に誘はれない、自由にはならない處から、遠いが花の香とか云ひます。餘計に私なんざ懷くつ

て、（菖ちやんお遊びな）が言へないから、合圖の石をかち／＼叩いては、其の家の前を通つたもんでした。其が一晩、眞夜中に、十疊の座敷を閉め切つたまゝで、何處へか姿をかくしたさうで。

丑年の事だから、と私が唄を聞きたさに、尋ねた時分・・・・・今から何年前だらう、と叔母か指を折りましたつけ・・・・・多年になりますが。」

三十一

「故郷では、未婚の女が、丑年の丑の月の牛の日に、衣を清め、身を清め・・・・・」

唾をのんで聞いた客僧が、

「成程、」

と腕組みして、

「精進潔斎。」

「そんな大した、」

と言消したが、又打頷き、

「何うせ娘の子のする事です。然うまでも行きますまいが、髪を洗つて、湯に入つて、而して其の洗髪を櫛巻きに結んで、笄なしに、紅ばかり薄くつけるのださうです。

それから、十疊敷を閉込んで、床の間をうしろに、何處か、壁へ向いて、其處へ婦の魂を据ゑる、鏡です。

丑童子、斑の御神、と一心に念じて、傍目も觸らないで、瞻めて居ると、其の丑の年丑の月丑の日の・・・・・丑時になると、其の鏡に・・・・・前

世から定まつた縁の人の姿が見える、と云ふ傳説があります。

娘は、誰も勝手を知らない、其の家で、其の丑待を獨でして、何かに誘はれてふら／＼と出たんですつて。・・・・・其切になつて居るんですもの。

手のつけやうがありますまい。

愈／＼となると、尚ほ聞きたい、それさへ聞いたら、亡くなつた母親の顔も見えよう、とあせり出して、山寺にありました、母の墓を揺ぶつて、記の松に耳をあてゝ聞きました、松風の聲ばかり。

其の山寺の森をくゞつて、里に落ちます清水の、麓に玉散る石を噛んで、此の齒音せよ、此の舌歌へ、と念じても、戦くばかりで聲が出ない。

うはの空で居た所為か、一日、山路で怪我をして、足を挫いて寝ることになりました。雑とこれがために、半月腦んで、漸々杖を突いて散歩が出來るやうになりますと、籠を出た鳥のやうに、町を、山の方へ、ひよい／＼と杖で飛んで、いや不恰好な蛙ですー兩側は家續きで、丁ど大崩壊の、あの街道を見るやうに、なぞへに前途へ高くなるー突當りが撞木形になつて、其處が又通街なんです。私が貴僧、

自分の町をやがて其の九分ぐらゐな處まで參つた時に、向うの縱通りを、向つて左の方から來て、此方へ曲りさうにしたが、白地の浴衣を着て其處に立つた私の姿を見ると、フト立停まつた美人があります。扮裝なぞは氣がつかず、洋傘は持つて居たやうでしたつけ、それを翳して居たか、畳んだのを支いて居たか、判然しないが、あゝ似たやうな、と思つたのは、其の行方が分らんと云ふ一人。

ト、むかうでも莞爾しました……・其處へ笠を深くかぶつた、草鞋穿きの、狩人體の大漢が、鐵砲の銃先へ淺葱の小旗を結へつけたのを肩にして、鐵の鎖をづらりと曳いたのに、大熊を一頭、のさ／／と曳いて出ました。

山を上に見て、正的に町と町が附ついた三辻の、其の附根の處を、横に切つて、左角の土蔵の前から、右の角が、菓子屋の、其の葦簀の張出まで、僅か二間ばかりの間を通つたんですから、のさりと行くのも、ほんの頃刻。

熊の背が、佇んだ婦人の乳のあたりへ、黒雲のやうにかゝると、其につれて、一所に横向きになつて歩行き出しました。あとへぞろ／／大勢小兒

が・・・・・國では珍らしい獣だからでせう。
右の方へかくれたから、角へ出て見ようと、急足に出よう、とすると、馴れない跛ですから、腕へ臺についた杖を忘れて、躓いて、のめつたので、生爪をはがしたのです。
少時立てませんでした。
彼是して、出て見ると、最う何處へ行つたか影も形もない。
其後、旅行をして諸國を歩行くのに、越前の木の芽峠の麓で見かけた、炭を背負つた女だの、碓氷を越す時汽車の窓からちらりと見ました、隧道を出て、衝と隧道を入る間の茶店に、うしろ向きの女だの、都では矢のやうに行過ぎる馬車の中などに、それか、と思ふのは幾度も見かけたんですが・・・・・・其の熊の時のほど、印象のよく明瞭に今まで殘つてるのは無いのです。
内へ歸つて、

（美しき君の姿は、
熊に取られた。
町の角で、町の角でーー

跛ひき／＼追へど及ばぬ。）

もしや手毬唄の中に、恁う云ふのは無かつたでせうか、と叔母に其の話をすると、眞日中に那樣ものを視て、那樣ことを云ふ貴下は、身體か弱いのです。當分外へ出てはなりません、と外出禁制。

以前は、其の形で、正眞正銘の熊の膽、と海を渡つて賣りに來たものがあるさうだけれど、今時はつひぞ見懸けぬ、と後での話。・・・・・」

三十二

「日が經つてから、叔母が私の枕許で、然までに思詰めたものなら、保養かた／＼、思ふ處へ旅行して、其の唄を誰かに聞け。

（妹の聲は私も聞きたい。）

と、手函の金子を授けました。今以つて叔母が貢いでくれるんです。

國を出て、足かけ五年！

津々浦々／＼、都、村、里、何處を聞いても、あこがれる唄はない。似たのはあつても、其後か、其の前か、中途か、或は其の空間か、何處かに望みの聲がありさうだな・・・・・と思ふばかり。また小兒たちも、手毬が下手になつたので、終まで突き得ないから、自然長いのは半分ほどで消えて居ます。

迚も尋常ではいかん、と思つて、最う唯、其の一人行方の知れない、稚ともだちばかり、矢も楯も堪らず逢ひたくなつて來たんですが、魔にとられたと言ふんですもの。高峰へかゝる雲を見ては、蔦をたよりに縋りたし、湖を渡る霧を見ては、落葉に乘つ

ても、追ひつきたい。巖穴の底も極めたければ、瀧の裏も覗きたし、何か前世の因縁で、めぐり逢ふ事もあらうか、と奥山の庚申塚に一人立つて、二十六夜の月の出を待つた事さへあるんです。

唯此の間ー名も嬉しい常夏の咲いた霞川と云ふ秋谷の小川で、綺麗な手毬を拾ひました。

宰八に聞いた、あの、嘉吉とか云ふ男に、緑色の珠を與へて、月明の村雨の中を山路へかゝつて、

（此處は何處の細道ぢや、

細道ぢや。

天神様の細道ぢや、

細道ぢや。）

と童謡を口吟んで通つたと云ふだけで、早や其の聲が聞えるやうで、」

僧は魅入られた如くに見えたが、溜息を吻と吐き、

「先おめでたい、では其の唄が知れましたか。」

「だうして唄は知れませんが、聲だけは、何うやら其の人・・・・・・否・・・・・・其のものであるらしい。此の手毬を弄ぶのは、確に其の婦人であらう。其の婦人は何となく、此の空邸に姿が見えるやうに思はれます。・・・・・・寧ろ私は然う信じて居ます。

爺さんに強請つて、此處を一室借りましたが、借りた日に最う其の手毬を取返されーー私は取返されたと思ふんですねーー美しく氣高い、其の婦人の心では、私のやうなものに拾はせるのでは無かつたでせう。

或は是を、小川の裾の秋谷明神へ届けるのであつたかも分らない。然うすると、名所だ、と云ふ、浦の、あの、子産石をこぼれる石は、以來手毬の絲が染まつて、五彩燦爛として迸る。此の色が、紫に、緑に、紺青に、藍碧に波を射て、太平洋へ月夜の虹を敷いたのであらうも計られません、」

と又恍惚となつたが・頚を垂れて、

「其の崇、其の罪です。此の凡ての怪異は。ーー自分の慾のために、自分の戀のために、途中で其の手毬を拾つた罰だらう、と思ふ、思ふんです。

崇らば崇れ！飽くまでも初一念を貫いて、其の唄を開かねば置かない。

心の迷か知れませんが。日のあたり見ます、怪しさも、凄さも、もしや、其が望みの唄を、何人かゞ暗示するのであらうも知れん、と思つて、恁う其の

口ずさんで見るんですーー行燈が宙へ浮きませう。

（美しき君の姿は、
萌黄の蚊帳を、
蚊帳のまはりを、婆はなしに、
通る行燈の俤や。）……

勿論、こんなのではありません。又は、
美しき君の庵は、
前の畑に影さして、
棟の草も露に濡わつゝ、
月の桂が芽屋にかゝる。）・・・・・・
些とも似ては居らんのです。屋根で鵝鳥が鳴く時は、
波に攫はれるのであらうと思ひ、板戸に馬の影がさせば、修羅道に堕ちるか、と驚きなからも、
（屋根で鵝鳥の鳴き叫ぶ、
板戸に駒の影がさす。）

と、現にも、絶えず耳に開きますけれど、其だと心は頷きません。
如何なる事も堪忍んで、何うぞ其の唄を聞きたい、

と恁うして参籠をして居るんですが、崇ならばよし一罪は厭はん、」

と激しく言ひつゝ、心づいて、悄然として僧を見た。

「但其の、手毬を取返したのは、唄は教へない、と云ふ宣告ぢやあなからうか、と然う思ふと情ない。あゝ、お話が八岐に成つて、手毬は・・・・・然うです、天井から猫が落ちます以前、私が縁側へ一人で坐つて居ます處へ、あの白粉の花の蔭から、芋茎の菓を顔に當てた小兒が三人、ちよろ／＼と出て來て、不思議さうに私を見ながら、犬ころがなつくやうに傍へ寄ると、縁側から覗込んで、手毬を見つけて、三人でうなづき合つて、（其をおくれ。）と言ひます。

（お前たちのか。）

と聞くと、頭を掉るから、

（ぢや、小父さんのだ。）と言ふと、男が毬を、と云ふ調子に、

（わはゝ）と笑つて、それなりに、ちら／＼と何處かへ取つて行つたんでした。」ーー

三十三

「何、私がうはさして居さつせえた處だつて・・・・・はあ、お前様二人でかね。」

どツこいしよ、と立つたまゝ、廣縁が高いから、背負つて來た風呂敷包は、腰ぎりに丁と乘る。

「だら、可いけんども、」

と結目を解下ろして、

「天井裏でうはさべいされちや堪んねえだ。」

と聲を密めたが、宰八は直ぐ高調子、

「いんね、私一人ぢやござりましねえ。喜十郎様が許の仁右衞門の苦蟲と、學校の先生ちゆが、同士にはい、門前まで來つけえがの。

あの、樹の下の、暗え中へ頭突込んだと思はつせえまし、お前様、苦蟲の親仁が年效もねえ、新造子が抱着かれたやうに、キヤアと云ふだ。」

「何うしたんです。」

「何か又、」

と、僧も夜具包の上から伸上つて顔を出した。

宰八紅顱巻をかなぐつて、

「こりや、はい、御坊様御免なせえまし。御本家からも宜しくでござりやす。いづれ喜十郎様お目に懸りますだが、まづ緩りと休まつしやりましとよ。私恁う云ふぞんざいもんだで、お辭儀の仕様もねえ。婆様がよツくハイ御挨拶しろと云うてね、お前様旨からしつけえ、團子をことづけて寄越しやした。茶受にさつしやりやし。あとで私か蚊いぶしを才覺しながら、ぶつ／＼澁茶を煮立てますべい。

其よりか、お前様、腹アすかつしやつたらうと思ふで、御本家から又重詰めにして寄越さしつた、其奴をぶら下げながら苦蟲が、右のお前様、キヤアでけつかる。門外の草原を、まるで川の瀬さ渡るやうに、三人がふら／＼よち／＼モノ小半時かゝつたが、藝もねえ、えら遲くなつて済んましねえ。」

「何とも御苦勞、」

と僧は慇懃に頭をさげる。

「其の人たちは、何うしたのかね。」

と明が尋ねた。

「はい、其さ、其のキヤアだから、お前様、だうした仁右衞門と、云ふと、苦蟲が、面さ澁くして、（あゝ、厭なものを見た。おらが鼻の尖を、ひいら

／＼、あの生白けた芋の葉の長面が、ニタニタ笑えながら横に飛んだ。精靈棚の瓢箪が、ひとりでにぽたりと落ちても、御先祖の戒とは思はねえで、酒を留めねえ己だけんど、それにや蔓が枯れたちゆう道理がある。風もねえに芋の葉が宙を歩行くわけはねえ。あゝ、厭だ、總毛立つ、内へ歸つて夜具を被つて、づツしり汗でも取らねえでは、煩ひさうに頭も重い。）

と縮むだね。

例の小兒が驅出したらう、と然う言ふと、尚惡い。あの聲を聞くと堪らねえ。あれ、あれ、石を鳴らすのが、谷戸に響く。時刻も七ツぢや、と蒼くなつて、風呂敷包打置いて、ひよろ／＼歸るだ。

先生様、ではお前様、其の重箱を提げてくれさつせえ、と私が頼むとね。

（厭だ、）と云つけい。

（はてね、何故でがす。）

此處さ、お客様の前だけんど、氣にかけて下せえますなよ。

（軍歌でもやるならまだの事、子守や手毬唄なんかひねくるやうな奴の、辨當持つて堪るものか。）

と吐くでねえか。
奴は朋友に聞いた、と云ふだが、いづれ怪物退治に來た連中からだんべい。お客様何でかすか、お前様、子守唄拵へさつしやるかね。袋戸棚の障子へ、書いたもの貼つ置かつしやるのは、もの、其かね。」
明は恥ぢたる色があつた。
「こしらへるのぢやない、聞いたのを書き留めて置くんです。數があつて忘れるから、」
「はあ、私は又、こんな恐怖え處に落着いて居さつしやるお前様だ。
怨敵退散の貼御符かと思つたが。
何か、ハイ、わけは分ンねえがね、惡く言つたのがグツと癪に障つたで、
（なら可うがす、客人のものは持つて貰えますめえ、が、お前様、學校の先生様だ。可し、私あハイ、何も教へちや貰はねえだで、師匠ぢやねえ、同士に歩行くだら朋達だつぺい。蟹の宰八が手ンぼうの助力さつせえ。）
と極めつけたさ。
帽子の下で目を据ゑたよ。
（き様のやうな友達は持たん、失敬な。）と云つて

引返したわ。何か託け、根は臆病で遁げたゞよ。見さつせえ、韋駄天のやうに木の下を駈出して、川べりの遠くへ行く仁右衛門親仁を、（おゝい、おゝい、）

と茶番の定九郎を極めやあがる。」

三十四

其夜に限つて何事もなく、靜かに。・・・・・寝ようと云ふ時、初夜過ぎた。宰八が手燭に送られて、廣縁を折曲つて、遙かに廻廊を通つた僧は、雨戸の並木を越えたやうで、故郷には蚊帳を釣つて、一人寂しく友が待つ思がある。

「此處かい。」

「其を左へ開けさつせえまし、入口の板敷から二ツ目のが、男が立つて遣るのでがす。行抜けに北の縁側へも出られますで、お前様歸りがけに取違へてはなんねえだよ。二三年此方、向うへは誰も通抜けた事がねえで、當節柄ぢや、迷込んでは何處へ行くか、ハイ方角が着きましねえ。」

「最う分りましたよ。」

「可かあねえ、私、此處に待つとるで、燈をたよりに出て來さつせえ。

私も、此の障子の多いこと續いたのに、めら／＼破れのある具合が、ハイ一ツ一ツ白髑髏のやうで、一人で立つてる氣はしねえけんど、お前様が坊様だ

けに氣丈夫だ。えら茶話がもてゝ、何度も土瓶をかはかしたで、入かはつて私もやらかしますべいに、待つてるだよ。」

僧は戸を開けながら、只、聲をかけて、

「御免下さい。」

と、ぴたりと」閉めた。

「あ、あ、氣味の惡い。誰に挨拶さつせるだ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。はて、急に變なことを考へたぞ。其處さ一面の障子の破れ覗いたら何か見えべいーー南無阿彌陀佛、あゝ、南無阿彌陀佛、・・・・・やあ、蝋燭がひら／＼する、何處から風が吹いて來るだ。これえ消したが最後、立處に六道の辻に迷ふだて。南無阿彌陀佛、御坊樣、まだかね。」

「一寸、」

「ひやあ、」

僧は半ば開いて、中に鼠の法衣で立ちつゝ、

「一寸燭を見せておくれ。」

「えゝ、お前樣、前へ戸を開けて置いてから何か言はつしやれば可い。板戸が音聲を發したか、と吃驚したゞ、はあ、何だね。」

「入口の、此の出窓の下に、手水鉢があつたのを、入りしなに見て置いたが、廣いので暗くて分らなくなりました。」

「あゝ、手、洗はつしやるのかね、」

と手燭ばかりを、づいと出して、

「鉢前にや、夜が明けたら見さつせえまし、大した唐銅の手水鉢の、此の邸さ曳いて來る時分に牛一頭かゝつた、見事なのがあるけんど、今開ける氣はしましねえ。・・・・・

えゝ、そよら、そよらと風だ。其、其の鉢にや水があれば可いがね、無くば座敷まで我慢さつせえまし、土瓶の殘を注けて進ぜる。」

「あります／＼。」

ざつと音をさして、

「冷い美しい水が、滿々とありますよ。」

「嘘を吐くもんでエねえ。何美い水かあんべい。井戸の水は眞蒼で、小川の水は白濁りだ。」

「ぢやあ燭で見る所為だらうか、」

「而して、はあ、何なみ／＼とあるもんだ。」

「否、縁切こぼれるやうだよ。あゝ、葉越さんは

綺麗好きだと見える。眞白な手拭が、」
と言ひかけて少刻黙つた。

今年より卯月八日は吉日よ
尾長蛆蟲成敗ぞする

「此處に倒にはつてあるのは、これは誰方がお書きなすつた、」
「・・・・・南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛・・・・・」
「あゝ、住いおてだ。」
と大和尚のやうに落着いて、大く言つたが、やがて些と慌しげに小さな坊さまになつて急いで出た。
「えゝ、疾く出さつせえ、私最う押堪へて、座敷から庭へ出て用たすべい。」
「眞個に誰が書いたんだね、女の手だが、」
と掛手拭を賞めた癖に、薄汚れた疊んだのを自分の袂から出して居る。
「南無阿彌陀佛、ソ、それは、それ、此の次の、次の、小座敷で亡くならしつけえ、何處かの嬢様が書いて貼つたゞとよ、直き其處だ、今ソンな事あ何うでも可え。頭から、慄然とするだに、」

「然(さ)うかい、あゝ私(わたし)も今(いま)、手(て)を拭(ふ)かうとすると、眞新(まあたら)しい切立(きりたて)の掛手拭(かけてぬぐひ)が、冷(つめた)く濡(ぬ)れて居(ゐ)たのでヒヤリとした。」

「や、」と横飛(よこと)びにどたりと踏(ふ)んだが、其(そ)の跫音(あしおと)を忍(しの)びたさうに、腰(こし)を浮(う)かせて、同一處(おなじところ)を蹌踉(よろ)〳〵々〳〵する。

三十五

「然うふら／＼さしちや燈が消えます。貸しなさい、私が其の手燭を持たうで。」

「頼んます、はい、何うぞお前様持たつせえて、次手に其の法衣着さつせえた姿から、光明赫燿と願えてえだ。」

僧は燭を取つて一足出たが、

「お爺さん、」

と呼んだのが、驚破事ありげに聞えたので、手んぼうならぬ手を引込め、不具の方と同一處で、掌をあけながら、据腰で顔を見上げる、と皺面ばかりが燭の影に眞赤になつた。ー一此の赤親仁と、青坊主が、廊下はづれに物言ふ状は、鬼が囁くに異ならず。

「えゝ、」

「何處か呻吟くやうな聲がするよ。」

「藝もねえ、威かして何うさつせる。」

「聞きなさい、それ・・・・・」

「う、う、う、」

と厭な聲。

「爺さん、お前が呻吟くのかい。」
「否、」
と變な顔色で、鼻をしかめ、
「ふん、難産の呻吟聲だ。はあ、御新姐か唸らしつけえ、姑獲鳥になつて鳴くだあよ。もの、奥の小座敷の方で聞えべいかね。」
「奥も小座敷も私は知らんが、障子の方ではないやうだ。便所かな、」
「ひえゝ、今、お前様が入らつしたばかりでねえかね、」
「然れば、」
と斜めに聞澄まして、
「おゝ、庭だ、庭だ、雨戸の外だ。」
「はあ、」
と宰八も、聞定めて、吻と息して、
「先構外だ、此の雨戸がハイ鐵壁だぞ。」と、ぐいと壓へて又蹈張り、
「野郎、入つて見やがれ、野郎、活佛さまが附いてござるだ。」
「佛では尚打棄つては措かれない、人の聲ぢや、お爺さん、明けて見よう、誰か苦んで居るやうだ

よ。」

「これ、静かにさつせえ、術だ、術だてね。もの其術で、背負引き出して、お前様天窓から鹽よ。私は手足い引捩いで、月夜蟹で肉がねえ、と遣らうとするだ。ほつてもない、開けさつしやるな。早く座敷へ行きますべい。」

「あれ、聞きなさい、助けてくれ・・・・・と云ふではないか。」

「へ、疾いもんだ。人の氣を引きくさる、坊様と知つて慈悲で釣るだね、開けまいぞ。」

と云ふ時・・・・・判然聞えたが、しはがれた聲であつた。

「助けてくれ……」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「宰八よう、」ーーと、葎がくれに蟲の聲。

手ぼう蟹ふるへ上つて、

「ひやあ、苦蟲が呼ぶ。」

「何、蟲が呼ぶ？」

「えゝ、仁右衞門の聲だ。南無阿彌陀佛、ソ、ソレ見さつせえ。宵に門前から遁歸つた親仁めが、今

時分何しに此處へ來るもんだ。見ろ、畜生、さ、さすが畜生の淺猿しさに、其處までは心付かねえ。へい、人間様だぞ。おのれ、荒神様がついてござる、猿智慧だね、打棄つて置かつせえまし。」

と雨戸を離れて、肩を一つ揺つて行かうとする。廣縁のはづれと覺しき彼方へ、板敷を離るゝこと二尺ばかり、消え殘つた燈籠のやうな白紙がふらりと出て、眞四角に、燈が歩行き出した。

「はツあ、」

と退つて、僧に背を摺寄せながら、

「經文を唱へて下せえ、入つて來たわ、南無まいだ、なんまいだ。」

僧も爪立つて、浮腰に透かして見たが、

「行燈だよ、餘り手間が取れるから、座敷から葉越さんが見においでだ。さあ、三人となると私も大きに心強いーー此處は開くかい。」

「え、、これ、開けてはなんねえちゆうに、」

「だつて、あれ、あれ、助けてくれ、と云ふものを。鬼神に横道なし、と云ふ、情に抵抗ふ刃はない筈、」

枢をかた／＼、ぐつと、さるを上げて、づヅん、

かたりと開ける、袖を絞つて蔽ひ果さず、燭は颯と夜風に消えた。が、吉野紙を蔽へる如き、薄曇りの月の影の、隈ある暗き葎の中、底を分け出でゝ、打傾いて、其の光を宿して居る、目の前の飛石の上を、四つに這廻るは、そも如何なるものぞ。

三十六

聲を聞いたより形を見れば、尚確實に、飛石を這つて呻いて居たのは、苦蟲の仁右衞門であつた。

月明に、正しく其と認めが着くと、同一疑の中にも幾干か與易く思つた處へ、明が行燈を提げて來たので、益々力づいた宰八は、二人の指圖に、思切つて庭へ出たが、最う其までに漕ぎ着ければ、露に濡れる分は厭はぬ親仁。

さや／＼と葎を分けて、おぢい何うした、と摺寄ると、あゝ、宰八か助けてくれ。此の手を引張つて、と拝むか如く指出した。左の腕を、ぐい、と掴んで、獣にしては毛が少ねえ、おゝ／＼正眞正銘の仁右衞門だ、よく化けた、とまだそんな事を云ひなから、肩にかけて引立てると、飛石から離れるのが泥田を踏むやうな足取りで、せい／＼呼吸を切つて、しがみつくので、咽喉がしまる、と呟きながら、宰八も疾く埒を明けたさに、委細構はずずる／＼引摺つて縁側に來る間に、明は最う一枚、雨戸を開けて待構へて、氣分は何う？まあ、此方へ、と手傳つて引入

れた、仁右衞門の右の手は、竹槍を握つて居たのである。

是は、と驚くと、仔細ござります。水を一口、と云ふも硬ばり、唇は土氣色。手首も冷たく只戰きに戰くので、とも角も座敷へ連れよう・・・・・何しろ危いから、恁う云のはと、竹槍は明が預る。

引そいだ切尖の鋭いのが、法衣の袖を掠つたから、背後に立つた僧は慌てゝ身を開いて、行燈は手前が、と是が先へ立つ。

さあ負され、と蟹の甲を押向けると、否、それには及ばぬ、と云つた仁右衞門が、僧の裾を銜へた體に、膝で摺つて縁側へ這上つた。

あとへ、竹槍の青光りに艶のあるのを、柄長に取つて、明が續く。

背後で雨戸を閉めかけて、おぢい、腰が抜けたか、弱い男だ、と何うやら風向が可さゝうなので、宰八が嘲けると、うんにや足の裏が血だらけぢや、歩行と痕がつく、と這ひながら云つたのでーーイヤ其音の夥しさ。ぐわらりと閉め棄てに、明の背へ飛縋つた。ーー眞先へ行燈が、坊さまの裾あたり宙を歩行いて、血だらけだ、と云ふ苦蟲か馬の這身、竹槍が

後を壓へて、暗がりを蟹が通る。・・・・・廣縁を此の體は、扨々尋常事ではない。

やがて座敷で介抱して、漸々正気づくと、仁右衞門は四邊を〓し、あまゝたび口籠りながら、相濟みましねえ、お客様、御出家、宰八此方には尚の事、四十年來の知己が、餘り氣心を知らんやうで、面目もない次第ぢや。

御主人鶴谷様の此の別宅、近頃の怪しさ不思議さ。餘りの事に、これは一分別ある處と、三日二夜、口も利かずにまじ／＼と勘考した。はて巧んだり！適切此奴大詐欺に極まつた。汝等が謀つて、見事に妖怪邸に為了せる。棄て置けば狐狸の棲處、然もないまでも乞食の宿、焚火の火沙汰も不用心、給金出しても人は住まず、持餘しものになるのを見濟まし、立腐れの柱を根こぎに、瓦屋根を踏倒して、股倉へ掻込む算段、圖星々々。這！明神様の託宣ーーと眼玉で睨んで見れば、どうやら近頃から逗留した渡りものゝ書生坊、惡く優しげな顔色も、繪草紙で見た自來也だぞ、盗賊の張本ござんなれ。晩方來せた旅僧めも、其の同類、茶店の婆も怪しいわ。手引した宰八も抱込まれたに相違ない。道理こそ化物沙汰に

輪を掛る。待て待て狂人の眞似何でもない事、嘉吉も一升飲まされたーー巫山戯た奴等、何處だと思ふ。秋谷村には甘え柿と、苦蟲あるを知んねえか、と故と臆病に見せかけて、宵に遁げたは眞田幸村、やがてもり返して盗賊の巣を乗取る了簡。

いつものやうに黄昏の軒をうろつく、嘉吉奴を引捉へ、確と親元へ預け置いたは、屋根から天蚕絲に鈎をかけて、行燈を釣らせぬ分別。豫て謀計を喋合せた、同じく晩方遁げる、と見せた、學校の訓導と、其筋の諜者を勤むる、狐店の親方を誘うて、此の三人、十分に支度をした。

二人は表門へ立向ひ、仁右衞門は唯一、怪しきものは突殺さう。狸に化けた人間を打殺すに仔細はない、と竹槍を引そばめて、木戸口から庭づたひに、月あかりを辿り辿り、雨戸をあてに近づいて、何か、手品の種がありはせぬか、と透かして尾根の周圍をぐるりと見ると。・・・・・

三十七

烏が一羽歴然と屋根に見えた。あゝ、あの下邊で、産婦が二人ーー定命とは思はれぬ無残な死にやうをしたと思ふと、屋根の上に、姿が何やら。

此の姿は、葎を分けて忍び寄つたはじめから、目前に朦朧と映つたのであつたが、立つて丈長き葉に添ふやうでもあり、寝て根を潜るやうでもあるし、浮き上つて葉尖を渡るやうでもあつた。

で、大方仁右衛門自分の身體と、竹槍との組合せで、月明には、そんな影が出來たのだらう、と怪しまなかつたが、其の姿が、不圖屋根の上に移つたので。

唯見ると、肩のあたりの、すら／＼と優いのが、如何に月に描き直されたればとて、鍬を擔いだ骨組にしては餘りにしをらしい、と心着くと柳の腰。

其細腰を此方へ、背を斜にした裾が、脛のあたりへ瓦を敷いて、細くしなやかに掻込んで、蹴出したやうな褄先が、中空なれば遮るものなく、便なさゝうに、然も軽く、軒の蜘蛛の圍の大きなのに、はら

りと乗つて、水車に霧が懸つた風情に見える。背筋の靡く、頸許のほの白さは、月に預けて際立たぬ。其の月影は朧ながら、濃い黒髪は緑を束ねて、森の影が雲かと落ちて、其の俤をうらから包むだ、向うむきの、やゝ中空を仰いだ状で、二の腕の腹を此方へ、雪の如く白く見せて、静に鬢の毛を撫でゝ居た。

白魚の指の尖の、ちら／＼と髪を潛つて動いたのも、思へば見えよう道理はないのに、的切耳が動いたやうで。

驚破、獣か、人間か。何れ此の邸を踏倒さう屋根住居してござる。おのれ、見ろ、と一足退つて竹槍を引抜き、鳥を差いた覺えの骨で、スーツ！突出した得物の尖が、右の袖下を潛るや否や、踏占めた足の裏で、ぐ、ぐ、ぐ、と聲を出したものがある。

地が急に柔かく、ほんのりと暖かに、ふつくりと綿を踏んで、下へ沈みさうな心持。他愛なく膝節の崩れるのに驚いて、足を見る、と白粉の花の上。

と思つたが其は遠い。此のふつくりした白いものは、南無三寳仰向けに倒れた女の胸、膨らむ乳房の眞中あたり、鳩尾を、土足で蹈んで居ようでないか。

仁右衞門ぶる／＼となり、据眼に熟と見た、白い

咽喉をのけ様に、苦痛に反らして、黒髪を亂したが、唇を洩る齒の白さ。草に鼻筋の通つた顔は、忘れもせぬ鶴谷の嫁、初産に世を去つた御新姐である。

親仁は天窓から氷を浴げた。

恐しさ、怪しさより、勿體なさに、慌てゝ踏んで居る足を除けると、我知らず、片足が、又ぐツと乘る。

うむ、と呻かれて、ハツと開くと、舊の足で踏みかける。顛倒して慌てるほど、身體のおしに重みがかゝる、と其の度に、ぐ、ぐ、と泣いて、口から垂々〳〵と血を吐くのが、咽喉に懸り、胸を染め、乳の下を颯と流れて、仁右衞門の蹠に生暖う垂れかゝる。

あツと腰を抜いて、手を支くと、其の黒髪を掻掴んだ。

御免なせえまし、御新姐様、御免なせえまし、と夢中ながら一心に詫びると、踏躙られる苦腦の中から、目を開いて、じろ／＼と見る瞳が動くと、口も動いて、莞爾する、・・・・・其の唇から血が流れる。

足は膠で附けたやう。

同一處を蠢く處へ、宰八の聲が聞えたので、救助

を呼ぶさへ呻吟いたのであつた。

恁くて、手を取つて引立てられたーー宰八が見た飛石は、魅せられた仁右衛門の幻の目に、即ち御新姐の胸であつたのである、足も未だ粘々する、手は此の通り血だらけぢや、と戦いたが、行燈に透かすと夜露に曝れて白けて居た。

「我折れ何とも、六十の親仁が天窓を下げる。宰八、夜深ぢやが本宅まで送つてくれ。片時も此の居まはり三町の間に居りたくない、生命ばかりはお助けぢや。」

と言つて、誰にするやら仁右衛門はへた／＼とお辭儀をした。

其處で、表門へ廻つた二人は、と皆連立つて出て見ると、訓導は式臺前の敷石の上に、ぺたんと坐つて居た。狐饂飩の亭主は見えず。・・・・・後で知れたが其は一散に遁げた、と言ふ。

何を見て驚いたか、渠等は頭を掉つて語らない。が、一人は緋の袴を穿いた官女の、目の黒い、耳の尖がつた凄じき女房の、薄曇の月に袖を重ねて、木

戸口(ぐち)に佇(たゝず)んだ姿(すがた)に見(み)たし、一人(ひとり)は朱(しゅ)の面(つら)した大猿(おほざる)にして、尾(お)の九(こゝの)ツに裂(さ)けた姿(すがた)に見(み)た、と誰(たれ)傳(つた)ふるとなく、程(ほど)經(た)つて仄(ほのか)に洩(も)れ聞(きこ)える。ー

三十八

二人寝には樂だけれども、座敷が廣いから、蚊帳は式臺向きの二隅と、障子と、襖と、兩方の鴨居の中途に釣手を掛けて、十疊敷の其の三分の一ぐらゐをーー大庄屋の夜の調度ーー淺緑を垂れ、紅麻の裙長く曳いて、縁側の方に枕を並べた。一日、朝から雨が降つて、晝も夜のやうであつた其の夜中の事ーーと語り掛けて、明はすや／＼と寝入つたのである。

孰れ其も、怪しき事件の一つであらう。・・・・・あはれ、此の少き人の、聞くが如くんば連日の疲勞も然こそ、今宵は友として我茲に在るがため、幾分の安心を得て現なく寝入つたのであらう、と小次郎法師か思ふにつけても、蚊帳越に瞻らるゝは床の間を背後にした灰白々〳〵とある行燈。

樂畫の文字もないか、今にも疊を離れさうで、裾が伸びるか、燈が出るか、蚊帳へ入つて來さうでならぬ。

然う云へば、掻き立てもしないのに、明の寝顔も、又惡く明るい。

「貴下、寝冷をしては不可ません。」
寝苦しいか、白やかな胸を出して、鳩尾へ踏落して居るのを、痩せた胸に障らないやうに、密つと引掛けたが何にも知らず、先可かつた。ーー仁右衛門が見た御新姐のやうに、此の手が觸つて血を吐きながら、莞爾としたら何うせう。然う思ふと寝苦しい、何にも見まい、と目を塞ぐ、と塞ぐ後から、睫がぱち／＼と音がしさうに開いて了ふのは、心が冴えて寝られぬのである。
掻卷を引被れば、衾の袖から襟かけて、大な洞穴のやうに覺えて、足を曳いて、何やらずる／＼と引入れさうで不安に堪へぬ。
すぽりと脱いで、坊主天窓をぬいと出したが、是は又、ばあ、と云つてニタリと笑ひさうで、自分の顔ながら氣味の惡さ。
其處で屹となつて、襟を合せて、枕を仕かへて、氣を沈めて、
「衆怨悉退散、」
と仰向けのま、呪すと、いくらか心が靜まつたと見えて、旅僧はつい、うと／＼としたかと思ふと、ぼたり、と何か枕許へ來たのかある。

が、雨垂とも、血を吸膨れた蚊が一ツ倒れた音とも、未だ聞定めないで現で居ると、又ぽたり……頓て、ぽた／＼と落ちたるか、今度は確に頰にかゝつた。

漸と冷いのが知れて、掌で撫でると、冷りとする。身震ひして少し起きかけて、旅僧は恐る恐る燈の影に透したが、幸に、血の點滴ではない。

扨は雨漏りと思ふ時は、蚊帳を傳つて雫するばかり、はら／＼と降り灌ぐ。

耳を澄ますと、屋根の上は大雨であるらしい。

浮世にあらぬ假の宿にも、これほど侘しいものはない。けれども、雨漏にも旅馴れた僧は、押默つて小止を待たうと思つたが、益々雫は繁くなつて、掻卷の裾のあたりは、びしよ／＼、刎上つて繁吹が立ちさう。

屋根で、鵝鳥が鳴いた事さへあると聞く。家ごと霞川の底に沈んだのでなからうか。

・・・・・トタンに額を打つて、鼻頭に浸んだ、大粒なのに、むつくと起き、枕を取つて掻遣りなから、立膝で、じりゝと寄つて、肩まで捲れた寝衣の袖を引伸ばしながら、

「もし、大分漏りますが、もし葉越さん。」
と呼んだが答へぬ。
目敏さうな人物が、と驚いて手を翳すと、薄の穂を揺るやうに、すや／＼と呼吸がある。
「あゝ、よく寝られた。」
と熟と顔を見ると、明の、眦の切れた睫毛の濃い、目の上に、キラ／＼とした清い玉は、同一雨垂れに濡れたか、あらず。・・・・・
來方は我にもあり、但御身は髪黒く、顔白きに、我は頭蒼く、面の黄なるのみ。同一世の孤兒よ、と覺えずはふり落ちた法師白身の同情の涙の、明の夢に届いたのである。
四邊を見ると、此の人目覺めぬも道理こそ。雨の雫の、絲の如く亂れかゝるのは、我が身體ばかりで、明の床には、夜をあさる蚤も居らぬ。
南無三寶、魔物の唾ぢや。

三十九

例の、其の幻の雨とは悟つたものゝ、見す／＼ひやりとして濡るゝのは、笠なしに山寺から豆腐買ひに里へ遣られた、小僧の時より辛いので、堪りかねて、蚊帳の裾を引被いで出たが、さて何處を居所とも定まらぬ一夜の宿。

消えなむとする旅籠屋の行燈を、時雨の軒に便る心で。

僧は燈火の許に膝行り寄つた。

寝衣を見ると、何處も露はども濡れては居らぬ。先頰のあたりから腕を拭こうとしたほどだったに……固より寝床に雨垂の音は無い。

其の腕を長く、つき反らして擦りながら、

「衆怨悉退散。」

と又念じて、静と心を沈めると、此の功徳か、蚊の聲が無くなつて、寂として静まり返る。

又餘りの静さに、自分の身體か消えて了ひはせぬか、と云ふ懸念がし出して、押瞑つた目を夢から覺めたやうに恍惚と、然も圓に開けて、眞直な燈心を

視透かした時であつた。
翻然と映つて、行燈へ、中から透いて影かさしたのを、女の手ほどの大な蜘蛛、と咄嗟に首を縮めたか、あらず、非ず、柱に觸つて、やがて油壷の前へこぼれたのは、木の葉であつた、青楓の。
僧は思はず手で拾つたが其の正しく木の葉であるや、然らずや、確めようとしたのか、何うか、其は渠にも分りはせぬ。
ト續いて、颯と影がさして、横繁吹に乘つたやうにさらりと落ちる。
我にもあらず、又もや其を拾つた時、先のを
「一枚、」と思はず算へた。
「二枚、」
とあとを數へ果さず、三枚目のは、貝ほどの槻の葉で、ひら／＼と燈を掠めて來た、影が大い。
「三枚、」
と口の裡で呟くと、早や四枚目が、ばさ／＼と行燈の紙に障つた。
「四枚、五枚、六枚、七枚、」
と數へる内に、拾ひ上げた膝の上は、早や隙間なく落葉に埋もるゝ。

空を仰ぐと、天井は底がなく、暗夜の深山にある心地。

おゝ、此の森を峠にして、こんな晩、中空を越す通魔が、魔王に、礑と捧ぐる、関所の通證券であらうも知れぬ。膝を拂つて衝と立つて、木の葉のはら／＼と揺れるに連れて、ぶる／＼と渠は身震ひした。

「えへん！」

と揉潰されたやうな掠れた咳して、何かに目を轉じて、心を移さうとしたが、風呂敷包の、御經を取出す間も遲し。さすがに心着いたのは、障子に四五枚、かりそめに貼つた半紙である。

是は此處へ來てからの、心覺えの童謡を、明が書留めて朝夕に且つ吟じ且つ詠むものだ、と宵に聞いた。

立つたまゝ寄つて見ると、眞先に目に着いたのが濃い墨で、

落葉一枚、

僧は更に悚然とした。

落葉一枚、

二枚、三枚、
十とかさねて、
落葉の數も、
ついて落いた君の年、
君の年ーー

振返ると、未だ其處に、掃掛けて廢したやうに、
蒼きが黒く散々である。

懐かしや、花の常夏、
霞川に影が流れた。
其俤や、俤やーー
紙を通して障子の彼方に、ほの白い其の俤
が・・・・・何うやら透いて見えるやうで、固くな
つた耳の底で、天の高さ、地の厚さを、あらむ限り、
深く、遙に、星の座も、龍宮の燈も同一遠さ、と思
ふ邊、黄金の鈴を振る如く、唯一聲、コロリン、と
琴か響いた。
はつと半紙を見ると、瞳へチラリ。
コロリン！
と字が動いたやう。續けて

琴(こと)の音(ね)が……

と記(しる)して有(あ)つた。

四十

客僧は思案して、心を落着け、衣紋を直して、さて、中に佛像があるので、床の間を借りて差置いた、荷物を今解き始めたが、深更の此の擧動は、木曾街入道の盗賊めく。

不浄よけの金欄の切にくるんだ、たけ三寸ばかり、黒塗の小さな御厨子を捧げ出して、袈裟を机に折り、其の上へ。元來此の座敷は、京ごのみで、一間の床の間の傍に、高い袋戸棚が附いて、傍は直ぐに縁側の、戸棚の横が満月形に庭に望んだ丸窓で、嵌込の戸を開けると、葉山繁山中空へ波をかさねて見えるのが、今は焼けたが故郷の家の、書院の構へに肖で、懐しいばかりでない。是も此處で望の達せらるゝ兆か、と床い、と明が云つて、直ぐに此の戸棚を、卓子擬ひの机に使つて、旅硯も裾ゑてある。椅子がはりに脚榻を置いて。……

周圍が廣いから、水差茶道具の類も乗せて置く。

其處で、此の男の旅姿を見た時から、丁と心づもりをしたさうで、深切な宰八爺いは、夜の具と一所

に、机を背負て來てくれたけれども、其は使はないで、床の間の隅に、埃は据ゑず差置いた。心に叶つて逗留もしやうなら、用ゐて書見をなさいまし、と夜食の時に言つてくれた。

其の机を、今爰へ。

御厨子を据ゑて、扨て何處へ置直さうと四邊を視た時、蚊帳の中で、三聲ばかり、太く明か魘された。が・・・・・此方の胸が痛んだばかりで、揺起すまでもなく、幸に又靜になつた。

障子を開けて、縁側は自分も通るし、一方は庭づたひに入つた口で、日頃は兎に角、別に今夜は何事もない。頬に氣になるのは、大掃除の時のために、一枚はづれる仕掛けだと云ふ、向うの天井の隅と、其の下に開けた事のない隔ての襖の合せ目である。

「吾佛守らせたまへ。」

と祈念なし、机を取つて、押戴いて、屹と見て、其方へ、と座を立たうとする。

途端であつた。

「しばらく。」

づしん、地の底へ響く聲がした。

明が呼んだか、と思ふ蚊帳の中で、又烈しく魘さ

れるので、呼吸を詰めて、

「・・・・・・……」

色を變へる。

襖の陰で、

「客僧しばらくーー唯今其へ參るものがござる。往來を塞ぐまい。押して通るは自在ぢやが、佛像ゆゑに遠慮をいたす。いや、御身に向うて、害を加ふる仔細はない。」

唯見ると襖から承塵へかけた、雨じみの魍魎と、肩を並べて、其の頭、鴨居を越した偉大の人物。眉太く、眼圓に、鼻隆うして口の角なるが、頬肉豊に、あつぱれの人品也。生びらの帷子に引手の如き漆紋の着いたるに、白き襟をかさね、同一色の無地の袴、折目高に穿いたのが、襖一杯にぬつくと立つた。ゆき短な右の手に、畳んだまゝの扇を取つて、温顔に微笑を含み、動ぎ出でつ、ともなく客僧の前へのつしと坐ると、氣に壓された僧は、犇と茶斑の大牛に引敷かれたる心地がした。

はつと机に、突俯さうとする胸を支へて、

「誰だ。」

と言つた。

「六十餘州、罷通るものぢや。」
「何と申す、何人・・・・・・」
「到る處の惡左衞門、」
と扇子を構へて、
「唯今、秋谷に罷在る、即ち秋谷惡左衞門と申す。」
「惡・・・・・・・・・」
「惡は善惡の惡でござる。」
「おゝ、惡・・・・・魔、人間を呪ふものか。」
「否、人間をよけて通るものぢや。清き光天にあり、夜鴉の羽うらも輝き、瀬の鮎の鱗も光る。隈なき月を見るにさへ、捨小舟の中にもせず、峰の堂の縁でもせぬ。夜半人跡の絶えたる處は、却つて茅屋の屋根ではないか。
然るを、故と人間どもが、迎へ見て、損はるゝは自業自得ぢや。」

四十一

「眞日中に天下の往來を通る時も、人が來れば路を避ける。出合へば傍へ外れ、遣過ごして背後を參る。が、屡々見返る者あれば、煩はしさに隱れ終せぬ、見て驚くは其奴の罪ぢや。

如何に客僧、未だ拙者を疑はるゝか。」

と莞爾として、客僧の坊主頭を、やがて天井から瞰下ろしつゝ、

「恁くても尚、我等が此の宇宙の間に罷在るを怪まるゝか。うむ、疑ひに〓られたな。〓いた其の瞳も、直ちに瞬く。

凡そ天下に、夜を一目も寝ぬはあつても、瞬をせぬ人間は決してあるまい。惡左衞門をはじめ夥間一統、即ち其の人間の瞬く間を世界とするー瞬くと云ふ一秒時には、日輪の光によつて、御身等が顏容、衣服の一切、睫毛までも寫し取らせて、御身等其の生命の終る後、幾年にも活けるが如く傳へらるゝ長き時間のあるを知るか。石と樹と相打つて、火をほとばしらすも瞬く間、又其の消ゆるも瞬く間、銃丸

の人を貫ぬも瞬く間だ。
總て一度唯一人の瞬きする間に、水も流れ、風も吹く、木の葉も青し、日も赤い。天下に何一つ消え失するものは無うして、唯其の瞬間、其の瞬く者にのみ消え失すると知らば、我等が世にあることを怪むまい。」
と悠然として打頷き、
「其處でぢや、客僧。たとひ其の者の、自から招く禍とは言へ、月の忽ち雲に隱れて、世の暗くなるは怪まず、行燈の火の不意に消ゆるに喚き、天に星の飛ぶを訝らず、地に瓜の躍るに絶叫する者どもが、われら一類が為す業に怯かされて、其の者、心を破り、氣を傷け、身を損へば、おのづから引いて、我等修業の妨となり、從うて罪の障となつて、實は大に迷惑いたす。」
と、やゝ歎息をするやうだつたが、更めて、又言つた。
「時に、此の邸には、當月はじめつ方から、別に逗留の客がある。同一境涯にある御仁ぢや。われら附添つて眷屬ども一同守護をいたすに、元來、人足の絶えた空屋を求めて便つた處を、唯今眠り居る少

年の、身にも命にも替ふる願あつて、身命を賭物にして、推して草叢に足痕を留めた以來、兎角人出入騒々しく、かた／＼妨げに相成るから、われら承つて片端から追拂ふが、弱つたは此の少年ぢや。

顔容に似ぬ其の志の堅固さよ。唯お伽めいた事のみ語つて、自から其の愚さを恥ぢて、客僧、御身にも話すまいが、や、此の方實は、もそつと手酷い試をやつた。

或は大磐石を胸に落し、我其上に蹈跨つて咽喉を緊め、五體に七筋の蛇を絡はし、牙ある蜥蜴に噛ませてまで呪うたが、頑として退かず、悠々＼と歌を唄ふに、我折れ果てた。

よつて最後の試み、として唯た今、少年に人を殺させたーー即ち殺された者は、客僧、御身ぢやよ。」

と、じろ／＼と見るのである。

覺悟しながら戰いて、

「此處は、此處は、此處は、冥土か。」

と目ばかり働く、其の顔を見て、でつぷりとした頬に笑を湛へ、くつ／＼忍笑ひして、

「いや、別條はない。が、丁ど此の少年の、乃麗

された時、客僧、何と、胸か痛かつたらう。」

ヅキリと應へて、

「おゝ、」

「即ち少年が、御身に毒を飲ませたのだ。」

「・・・・・・・・・・・・」

「別でない。それ／＼其の戸袋に載つた朱泥の水差、其に汲んだは井戸の水ぢやが、久しい埋井ぢやに因つて、水の色が眞蒼ぢや、まるで透通る草の汁よ。

客僧等が茶を參つた、爺が汲んで來た、あれは川水。其の白濁がまだしも、と他の者は其を用ゐる、が此の少年は、前に猫の死骸の流れたのを見たゝめに、得飲まずして此の井戸のを仰ぐ。

今も言ふ通りだ。殺さぬまでに現責に苦しめ呪ふがゆゑ、生命を縮めては相成らぬで、毎夜少年の氣付かぬ間に、振袖に緋の扱帯した、面が狗の、召使に持たせて、われら秘藏の濃緑の酒を、瑠璃色の瑪瑙の壷から、回生剤として、其の水にしたゝらし置くが習ぢや。」

四十二

「少年は味うて、天與の靈泉と舌鼓を打つて居る。我ら、乃し少年の魂に命じて、即ち其の酒を客僧に勧め飲ましむる夢を見させたわ。

（唯一口試みられよ、爽な涼しい芳しい酒の味がする、）と云ふに因つて、客僧、御身は猶更ら猶豫ふ、手が出ぬわ。」

と又微笑み、

「毒味までしたれば、と少年は、ぐと飲み／／、無理に勧める。然までは、とうけて恐る／／干すと、やゝあつて、客僧、御身は苦悶し、煩亂し、七轉八倒して黒き血のかたまりを吐くぢや。」

客僧は色眞蒼である。

「驚いて少年が介抱する。が、最う叶はぬ、臨終と云ふ時、

（吾は僧なり、身を殺して仁をなし得れば無上の本懐、君其の素志を他に求めて、疾く此の恐しき魔所を遁れられよ。）

と遺言する。是ぞ、われらの誂ぢや。

蚊帳の中で、少年の魘されたは、此の夢を見た時よ、喃。

是ならば立退くであらう、と思ふと、あゝ、埒あかぬ。客僧、御身か假に落入るのを見る、と涙を流して、共に死なうと決心した。

葛籠に秘め置く、守刀をキラリと引抜くまで、襖の蔭から見定めて、

（あゝ、しばらく、）

と留めたは、さて、殺しては相濟まぬ。

是によつて、われら守護する逗留客は、御自分の方から、此の邸を開いて、もはや餘所へ立退くぢやが。

其の以前、直々に貴面を得て、客僧に申談じたい儀があると謂はるゝ。

客は女性でござるに因つて、一應拙者から申入れる。ために是へ罷出た。

秋谷惡左衞門取次を致す、」

と高らかに云つて、穏和に、

「お逢ひ下されうか、如何、」

と云つた。

僧は思はず、

「は、」と答へる。

聲も終らず、小山の如く膝を揺げ、向け直したと

見ると、

「ござらつしやい！」

破鐘の如き其の大音、哄と響いた。目くるめいて魂遠くなるほどに、大魔の形體、片隅の暗がりへ吸入まれたやうにすツと退いた、が遙に小さく、凡そ螢の火ばかりになつて、然も其衣の色も、袴の色も、顔の色も、頭の毛の總髪も、鮮麗に尚目に映る。

「御免遊ばせ。」

向うから襖一枚、颯と蒼く色が變ると、雨浸の鬼の繪の輪郭を、亂れたまゝの輪に残して、ほんのり桃色が其の上に浮いて出た。

唯見ると、房々とある艶やかな黒髪を、耳許白く梳つて、櫛卷にすなほに結んだ、顔を俯向けに、撫肩の、細く袖を引合せて、胸を抱いたが、衣紋白く、空色の長襦袢に、朱鷺色の無地の羅を襲ねて、草の葉に露の玉と散つた、淺緑の帯、薄き腰、弱々と絲の艶に光を帯びて、乳のあたり、肩のあたり、其の明りに、朱鷺色が、淺黄が透き、膚の雪も幽に透く。

黒髪かけて、襟かけて、月の雫かゝつたやうな、裾は捌けず、しつとりと爪尖き輕く、ものゝ居て腰

を捧げて進むる如く、底の知れない座敷をうしろに、果なき夜の暗さを引いたが、歩行くともなく立寄つて、客僧に近寄る時、何時の間にか襖が開くと、左右に雪洞か二つ並んで、敷居際に差向つて、女の膝ばかりが控へて見える。其のいづれかゞ狗の顔、と思ひをめぐらす暇もない。

僧は前に彳んだのを差覗くやうに一目見て、

「わツ、」

とばかりに平伏した。實にこそ其の顔は、爛々たる銀の眼一隻び、眦に紫の隈暗く、頰骨のこけた頤蒼味がゝり、淺黄に窪んだ唇裂けて、鐵漿着けた口、柘榴の舌、耳の根には針の如き鋭き牙を噛んで居たのである。

四十三

「おゝ、自分の顔を隠したさ。貴僧を威す心ではない、戸外へ出ます寸支度のまゝ・・・・・まあ、お恥かしい。」

と、横へ取つたは白鬼の面。端麗にして威嚴あり、眉美しく、目の優しき、其の顔を差俯向け、しとやかに手を支いた。

「は、は、はじめまして、」

と、しどろになつて會釋すると、面を上げた寂しい頬に、唇紅う莞爾して、

「前刻、憚へ行らつしやいます、廊下でお目に懸りましたよ。」

客僧も、今はなか／＼に胴据りぬ。

「貴女は何誰でございます。」と尋ねたが、其時は略其誰なるかを知つて居るやうな氣がしたのである。

美女は褄を深う居直つて、蚊帳を透して打傾く。

萌葱か迫つて、其の衣の色を薄く包んだ。

「此の方の、母さんのお知己、明さんとも、お友

達・・・・・」

と口を結んだが愁を帯びた。此方は、じり／＼と膝を向けて、

「あ、、貴女が、」

「あの、其に就きまして、貴僧にお願ひがございますが、どうぞお聞き下さいまし。」

と又蚊帳越に打視め、

「お最愛しい、澤山お窶れ遊ばした。罪も報もない方が、こんなに艱難辛苦して、命に懸けても唄が聞きたいとおつしやるのも、母さんの戀しさゆゑ。

其の唄を聞かう／＼と、お思ひなさいます心から、此頃では身も世も忘れて、まあ、私を懐しがつて、迷つて戀におなりなすつた。

其の唄は稚い時、此の方の母さんから、口移しに教はつて、私は今も、覺えて居る。

恁うまで、お憧れなさるもの、一寸一目お目にかゝつて、お聞かせ申たうございますけれど、今顔をお見せ申しますと、お慕ひなさいます御心から、前後も忘れて夢見るやうに、袖に搦んで手に縋り、胸に額を押當てゝ、母よ、姉よ、とおつしやいますもの。

どうして貴僧、摺抜けられよう、突離されよう、

振切られませう、私は引寄せます、抱緊めます。
と血を分けぬ、男と女は、天にも地にも許さぬ掟。
私たちには自由自在ーー何の道浮世に背いた身體が、其では外に願ひのある、私の願の邪魔になります。假令其とても、棄身の私、唯最惜さ、可愛さに、氣の狂ひ、心の亂れるに随せましても、覺悟の上なら私一人、自分の身は厭ひはしませぬ。
厭はぬけれど・・・・明さんか然うすると、私たちと同一やうな身の上になりますもの・・・・・
其も最う、此の頃のお心では、明さんは本望らしいーー本望らしい、」
と然も懸想したらしく胸を抱いたが、鼻筋白く打背いて、
「あれ／／御覧なさいまし。恁う言ふ中にも、明さんの母さんが、花の梢と見紛ふばかり、雲間を漏れる高樓の、虹の欄干を乘出して、叱りも睨みも遊ばさず、兒の可愛さに、鬼とも言はず、私を拝んで居なさいます。お美しい、お優しい、あの御顔を見ましては、戀の血汐は葉に染めても、秋のあの字も、明さんの名に憚つて聲には出ませぬ。
一言も交はさずに、唯御顔を見たばかりでさへ、

最愛しさに覺悟も弱る。私は夫のござんす身體。他の妻でありながらも、母さんをお慕ひ遊ばす、其お心の優しさが、身に染む時は、戀となり、不義となり、罪となる。

實の産の母御でさへ、一旦此の世を去られし上はー幻にも姿を見せ、乳を呑ませたく添寝もしたいー我が兒最惜む心さへ、天上では戀となる、其の忌憚りで、御遠慮遊ばす。

況して私は他人の事。

餘計な御苦勞かけるのが御不便さ。決して私は明さんに、在所を知らせず隠れて居たのに、つい膝許の稚いものが、粗相で手毬を流したのか惡縁となりました。

彼方も私も身を苦しめ、心を傷めて居りましたが、お生命の危いまでも、此處をおたち遊ばさぬゆゑ、私わきへ參ります。

餘りお心か可傷しい、然までに思召す其の毬唄は、其の内時節が參りますと、自然にお耳へ入りませう！其は今、私が此の邸を退きますと、最う隅々〳〵まで家中が明くなる。明さんも思ひ直して、又こゝを出て旅行立ちをなさいます。

早や今でも沙汰をする、此の邸の不思議な事が、
界隈へ拡がりますと、一一近い處の、別荘にあの、
お一方・・・・・」

四十四

「病の後の保養に來ておいでなさいます、それは／＼美しい、餘所の婦人が、氣輕な腰元の勸めるまゝ、徒然の慰みに、あの宰八を内證で呼んで、（鶴谷の邸の妖怪變化皆私が手傳ひの人と一所に、憂晴らしにしたいたづら遊戯、聞けば、怪我人も澤山出來、嘉吉とやら氣の違つたのもあるさうな、つい心ない、氣の毒な、皆の手當能くするやうに。）・・・・・

と白銀黄金を澤山授ける。

さあ、此の事が世に聞えて、はつと風説の立ますため、病人は心が引立ち、氣の狂つたのも安心して治りますが、免れられぬ因縁で、其の令室の夫と云ふが、旅行さきの海から歸つて、其の風聞を耳にしますとー此か世にも恐ろしい、嫉妬深い男でございます。ー

爾の變化沙汰のある間、其處に籠つた、と云ふ旅の少年。・・・・・此の明さんと、御自分の令室が、的切不義に極つた、と最早其の時は言譯立たず。鶴

谷の本宅から買ひ受けて、而して此の空邸へ、其の令室をとぢ籠めませう。

貴僧。

其美しい令室が、人に羞ぢ、世に恥ぢて、一室〜ルビどころ》一處を閉切つて、自分を暗夜に封じ籠めます。

而して、日が經つに從うて、見もせず聞きもせぬけれど、浮名が立つて濡衣着た、其の明さんが何となく、慕はしく、懐かしく、果は戀しく、憧〜ルビが》一憬れる。切ない思ひ、激しい戀は、今、私の心、又明さんの、毬唄聞かうと狂ふばかりの、其の思と同一事。

一歳か、二歳か、三歳の後か、明さんは、またも國々を廻り、廻つて、唄は聞かずに、此の里へ廻つて來て、空家懐し、と思ひませう。

然うなる時には、令室の、戀の染まつた靈魂が、五色かゞりの手毬となつて、霞川に流れもしやう。明さんが、思ひの丈を吐く息は、冷たき煙と立のぼつて、中空の月も隠れませう。二人の情の火が重り、白き炎の花となつて、襖障子も燃えませう。日、月でもなし、星でもなし、灯でもない明に、軈て顔を

合はせませう。

邸は世界の暗だのに。……此の十疊は暗いのに。

……

明さんの迷つた目には、煤も香を吐く花かと映り、蜘蛛の巣は名香の薫が靡く、と心時めき、此〜ルビよ〳〵—世の一切を一室に縮めて、而して、海よりも尚廣い、金銀珠玉の御殿とも、みやとも見えて、令室を一目見ると、唄の女神と思ひ崇めて、跪き、伏〜ルビをが〳〵—拝む。

長く冷たき黒髪は、玉の緒を揺る琴の絲の肩に懸つて響くやう、互の口へ出ぬ聲は、膚に波立つ血汐となつて、聞えぬ耳に調を通はす、幽に觸る手と手の指は、五ツと五ツと打合つて、水晶の玉の擦れる音、戰く裳と、震へる膝は、漂ふ雲に乗る心地。

あゝ是こそ、我が母君・・・・・と縋り寄れば、乳〜ルビぶさ〳〵—房に重く、胸に輕く、手に柔かく腕に撓く、女は我を忘れて、抱くーー

我兒危い、目盲ひたか。罪に落つる谷底の孤家の灯とも辿れよ、と實の母君の大空から、指さし給ふ星の光は、電となつて壁に閃めき、分れよ、退けよ、とおつしやる聲は、とゞろに棟に鳴渡り、涙は降つ

て雨となる、情の露は樹に潅ぎ、石に灌ぎ、草さへ受けて、暁の旭の影には瑠璃、紺青、紅の雫ともなるものを。

罪の世の御二人には、唯可恐しく、凄じさに、却つて一層、犇々と身を寄せる。其のあはれさに堪へかねて、今ほども申しました、兒を思ふさへ戀となる、天上の規を越えて、掟を破つて、母〜ルビぎみ》—君が、雲の上の高樓の、玉の欄干にさしかはす、桂の枝を引寄せて、其に縋つて御殿の外へ。

空に浮んだおからだが、下〜ルビかい》—界から見る月の中から、此の世へ下りる間には、雲が倒に百千萬千、一億萬丈の瀧となつて、唯どう／＼と底知れぬ下界の霄へ落ちて居る。あの、其の上を、唯一條、霞のやうな御裳でも、撓に揺れる一枝の桂をたよりになさる危さ。

おともだちの上臈たちが、不圖一人見着けると、俄に天樂の音を留めて、はら／＼と立かゝつて、上へ桂を繰り上げる。引留められて、御姿が、又もとの、月の前へ、薄色のお召物で、笄がキラ／＼と、星に映つて見えませう。

座敷の暗から不意に其を。明さんは、手を取合つたは仇し婦、と氣が着くと、襖も壁も、大紅蓮跪居る畳は針の筵。袖には蛇、膝には蜥蜴、目の前見る地獄の状に、五體は忽ち氷となつて、慄〜ルビつ》—然として身を退きませう。が、最う其の時は婦人の一念、大鐵槌で砕かれても、引寄せた手を離しませうか。

胸の思は火となつて、上手が書いた金銀ぢらしの錦繪を、炎に翳して見るやうな、面も赫と、胡〜ルビふん》—粉に注いだ臙脂の目許に、紅の涙を落すを見れば、又此の戀も棄てられず。恐怖と、恥羞に震ふ身は、人膚の温かさ、唇の燃ゆるさへ、清く涼しい月の前の母君の有様に、懐しさが劣らずなつて、振切りもせず、また猶豫ふ。

思餘つて天上で、せめて此の聲きこゑよと、下界の唄をお唄ひの、母君の心を推量つて、多勢の上臈たちも、妙なる聲をお合せあるーー唄は爾〜ルビときこ》—時聞えませう。明さんが望の唄は、其の自然の感〜ルビおう》—應で、胸へ響いて、聞えませう。」

と、神々〳〵しいまで面正しく。……

僧は合掌して聞くのであつた。

而して、其の人、其の時、はた明を待つまでもない、此の美人の手、一度我に觸れなば、立處に其の唄を聞き得るであらうと思つた。

四十五

美人は更めて、

「貴僧、此の事を唯貴僧の胸ばかりに、よくお留め遊ばして、おつしやつてはなりません。是は露ほども明かさずに、今の處、明さんを、よしなに慰めて上げて下さいまし。日頃のお苦みに疲れてか、まあ、すや／＼とよく寝て、」

と、する／＼と寄つた、姿が崩れて、ハタと兩手を畳につくと、麻の薫か發として、肩に萌黄の姿つめたく、薄紅が布目を透いて、

「明ちやん・・・・・・」

と崩るゝ如く、片頬を横に接けむとしたが、屹と立退いて、袖を合せた。

僧を見る目に涙か宿つて、

「それではお暇いたしませう。稚い事を、貴僧にはお恥かしいが、明さんに一式のお愛相に、手毬をついて見せませう、あの・・・・・・」

と掛けた聲の下。雪洞の眞中を、蝶々／＼のやうに衝と抜けて、切禿で兎の顔した、女の童が、袖に載せ

て捧げて來た。手毬を取つて、美女は、掌の白きが中に、魔界は然りや、紅梅の大いなる莟と掻撫でなから、袂のさきを白歯で含むと、、ふりが、はらりと襷にかゝる。

臈たけた笑、恍惚して、

「まあ、私ばかり極が悪い、皆さんも來ておつきでないか。」

蚊帳をはら／＼取卷いたは、桔梗刈萱、美しや、萩女郎花、優しや、鈴蟲、松蟲のー一聲々に、

（向うの小澤に蛇が立つて、
八幡長者のをと女、
よくも立つたり、企んだり、
手には二本の珠を持ち、
足には黄金のくつを穿き・・・・・）

壁も襖も、もみぢした、座敷はさながら手毬の錦ー一落ちた木の葉も、ぱらぱらと、行燈を繞つて繰る紅。中を縢つて雪の散るのは、幾つとも知れぬ女の手と手。其の手先が、心なしに一寸一寸／＼觸ると、僧の手首が自然はた／＼と躍上つた。

（京へのぼせて狂言させて、寺へのぼせて手習させて、寺の和尚が道樂和尚で、
高い縁から突落されて、）
と衝と投げ上げて、トンと落して、高くついた。

待てよ。古郷の涅槃會には、膚に抱き、袂に捧げて、町方の娘たち、一人が三ツ二ツ手毬を携へ、同じやうに着飾つて、山寺へ來て突競を戯れる習慣がある。少い男は憚つて、鐘撞堂から覗きつゝ其の遊戯に見惚れたが・・・・・・巨刹の黄昏に、大勢の娘の姿が、遙に壁に掛つた、極彩色の涅槃の繪と、何一状に、一幅の中へ縮まつた景色の時、本堂の背後、位牌常の暗い疊廊下から、一人水際立つた妖艶いのが、突きはせず、手鞠を袖に抱いたまゝ、すら／＼と出て、卵塔場を隔てた几帳窓の前を通る、と見ると、最う誰の蔭になつたか人數に紛れて了つた。其だ、此の人は、否、其の時と寸分違はぬーーと僧は心にーー大方明も鐘撞堂から、此の状を、今視めて居る夢であらう。何かの拍子に、其の鐘が鳴ると目か覺めよう、と思ふ内・・・・・

身動ぎに、此の美女の鬢の後れ毛、さら／＼と頬に掛ると、其の影やらむ薄曇りに、目ぶちのあたり寂しくなりぬ。

（笄落し小枕落し・・・・・）

と綾に取る、と根が揺らいで、さつと黒髪が肩に亂るゝ。

みだれし風采恥かしや、早是までと思ふらむ。落した手毬を、女の童の、拾つて抱くのも顧みず、よろ／＼と立かゝつた、蚊帳に姿を引寄せられ、棲のこぼれた立姿。

屋の棟熟と打仰いで、

「あれ、あれ、雲が亂るゝ。ー花の中に、母君の胸が揺ぐ。おゝ、最惜しの御子に、乳飲まさうと思召すか。其とも、私が擧動に、心騒ぎのせらるゝか。客僧方には見えまいが、地の底に棲むものは、晝も星の光を仰ぐ。御姿かたちは、よく見えても、彼處は天宮、此處は地獄、言と云つては交はされない。

美しき夢見るお方、」

あれ、彼處に母君在ますぞや。愛惜の一念のみは、魔界の塵にも曇りはせねば、我が袖、鏡と御覧ぜよ。

今、此の瞳に宿れる雫は、母君の御情の露を取次ぎ參らする、乳の滴ぞ、と袂を傾け、差寄せて、差俯き、はら／＼と落涙して、

「まあ、稚兒の昔にかへつて、乳を求めて、・・・・・・あれ、目を覺す・・・・・・」

然らば、然らば、御僧。此の人夢の覺めぬ間に、と片手をついて、わかれの會繹。

ト玄關から、庭前かけて、わや／＼ざわ／＼、物音、人聲。目を擦り、目を〓り、目を拭ひ居る客僧に立別れて、やがて靜々ーー狗の顏した腰元が、ばた／＼と前へ立ち、炎燃ゆ、と緋のちらめく袖口で音なく開けたーー雨戸に鏤む星の首途。十四日の月の有明に、片頬を見せた風采は、薄雲の下に朝顏の莟の解けた風情して、うしろ髪、打揺ぎ、一度蚊帳を振返る。

「やあ、」

と、蚊帳を拂つて、明が飜然と飛んで縋つた。ーー袂を支ふる旅僧と、押揉む二人の目の前へ、此時づか、と顯はれた偉人の姿、靄の中なる林の如く、黄なる帷子、幕を蔽うて、廂へかけて仁王立、大音に、

「通るぞう。」
と一喝した。
「はつ、」
と云ふと、奇異なのは、宵に宰八か一杯ー一汲んで來て、ー一緑の端近に置いた手桶か、ひよい、と倒斛斗に引くりかへると、ざぶりと水を溢しなから、アノ手でつか／＼と歩行き出した。
其の後を水が走つて、早や東雲の雲白く、煙のやうな潦、庭の草を流るゝ中に、月が沈んで舟となり、舳を颯と乗上げて、白粉の花越しに、すら／＼と漕いで通る。大魔の袖や帆となりけむ、美女は船の几帳にかくれて、

（此處は何處の細道ぢや、
細道ぢや、
天神様の細道ぢや、
細道ぢや、
少し通して下さんせ・・・・・・・・・
最切めて懐かしく聞ゆ、とすれば、樹立の茂に哄と風、木の葉、緑の瀬を早み・・・・・・・横雲が、

あの、横雲(よこぐも)が。

【完】